

令和 5 年度

農 業 試 験 場

業 務 年 報

令和 6 年 3 月

福井県農業試験場

令和5年度業務年報目次

1. 研究成果

(1) 実用化技術	1
(2) 指導活用技術	1
(3) 登録品種・特許等	1

2. 研究の概要

I 戦略的研究開発事業

(1) 安定良食味な水稻早生品種の開発	2
(2) 病気に強く省力生産できるミディトマト新品種の育成	2

II 地域科学技術振興研究事業（地域産業・技術振興課）

(1) ICT情報を活用した水稻自動可変施肥とスポット除草技術の確立	3
(2) 中山間の未来をうるおす超省力コンパクト園芸の確立	3
(3) 直売所に広めるくだもの栽培技術の確立	3
(4) ウメの超省力・スマート果樹栽培体系の確立	4
(5) 一年中おいしい‘越のルビー’を生産する低段密植栽培技術の開発	4
(6) 夏季の異常気象に対応できる白ネギ生産技術の確立	5
(7) 甘い！大っきい！福井オリジナルイチゴ新品種開発と多収技術確立	5
(8) 緑肥等を組み合わせた持続可能な水田利用体系の確立	6

III 提案型共同研究（R5）

(1) キュウリの土壌病害虫対策としての低コスト隔離栽培技術の確立	6
(2) タマネギの収量安定に向けた追肥技術の確立	7
(3) ナシ改植における早期成園化に適した苗木管理技術の確立	7

IV パイロット研究（R5）

(1) 房どりできるミニトマトの周年出荷体系の開発	7
---------------------------	---

V 現場移転促進（フォローアップ）を図る開発技術（R5）

(1) 越前スイセンの球根養成における省力化栽培技術の確立	7
-------------------------------	---

VI 予備試験（R5）

(1) 高温登熟耐性に関する育種素材の育成	8
(2) 小ギク栽培における環境にやさしい省力栽培技術の確立	8
(3) ブドウの早期収穫技術の開発	8
(4) 無加温で盆前出荷できるブドウ早生新品種の育成	8

VII その他事業

(1) 病虫害発生予察事業(国庫)	9
(2) 病虫害防除所運営事業(国庫)	11
(3) 農薬抵抗性検定事業(国庫)	11
(4) 減農薬防除体系実証事業(国・県)	11
(5) 重要病虫害等侵入警戒調査事業(国・県)	12
(6) 土壌保全対策費(土壌環境基礎調査事業)	12
(7) 肥料検査登録事業	13
(8) 奨励品種決定調査事業	13
(9) 原原種・原種ほ設置事業	13
(10) 優良種子生産体制確立	13
(11) 水稻生育指標調査	14
(12) 主要農作物優良品種育成事業(県)	14
(13) 農地土壌の炭素貯留能力を向上させるバイオ炭資材等の開発(国庫)	14
(14) 農業分野での衛星データ利用活用手法の確立	15
(15) 北陸新幹線高架橋農作物影響調査事業	15

3. 普及指導業務実績

(1) 県全域の普及指導活動の支援	15
(2) いちほまれ栽培技術の確立と普及	16
(3) データ駆動型農業の実践体制づくり支援、新品種導入によるミディトマトの産地拡大	16
(4) ナシおよびブドウの園芸タウン整備による産地振興	17
(5) 畜産経営支援	18
(6) 農業経営発展支援	19
(7) 6次産業の推進支援	19

4. 県民に開かれた研究機関を目指す活動

(1) 高校・大学受入授業	20
(2) プレスリリース実績	20
(3) 講演会・出前講座	21
(4) 園芸 LABO の丘による園芸教室と体験講座	22
(5) YouTube での動画コンテンツや SNS(X(旧 Twitter)、LINE)等での情報発信	26

5. 県、大学、高校等農業関係機関による意見交換

(1) 農業研究に係る合同成果発表会	27
--------------------	----

6. 農業者等の視察対応

7. 論文、雑誌、著書、発表、広報等

(1) 論文	27
(2) 著書	27
(3) 学会等講演発表	28
(4) 広報	29

8. 職員の研修、客員教授の招聘、職員の受賞

(1) 客員教授の招聘	29
-------------	----

9. 一般報告

(1) 施設	31
(2) 予算	31
(3) 組織と職員数	32
(4) 人事	33
(5) 主な備品等(令和4年度、50万円以上)	34

1. 研究成果

(1) 実用化技術

No.	技 術 名	内 容
1	加工・業務用タマネギの窒素施用量削減と追肥時期目安	加工・業務用秋播きタマネギ栽培における元肥および追肥の窒素施肥量をトータルで約 29%削減。窒素吸収の特徴を考慮し、2月中旬～3月下旬を目安に3回の追肥を推奨。
2	ナシ改植に適した大苗育成技術	不織布ポットによる苗木育成方法では、初期生育が促進され、平均新梢長は、地植えと比べて‘幸水’では約 1.6 倍、‘あきづき’では約 1.8 倍増加する。
3	直売所等でのキウイフルーツのおすすめ品種	食味、見た目、追熟のしやすさや、貯蔵性の高さ等を考慮し、直売所等での販売に適した‘紅妃’、‘東京ゴールド’、‘香緑’の3品種をおすすめ品種として選定した。
4	皮ごと食べられる赤系ブドウ「福井 15106 号」	種なしにでき、皮ごと食べられる大粒の赤系ブドウを育成した。県内限定栽培のオリジナル品種としての普及を目指す。
5	大麦の越冬後幼穂長からの出穂予測	大麦の出穂日を正確に予測することで、赤かび病の防除計画が立てやすく、防除効果も向上することから大麦の品質向上につながる。

(2) 指導活用技術

No.	技 術 名	内 容
1	隔離養液土耕栽培によるキュウリのセンチュウ対策	防根透水シートを埋設し根域制限をした状態で、養液土耕設備を利用し簡易に土壤消毒を行う事で、より効果的にキュウリのネコブセンチュウ被害を低減する。
2	スプレーポニックを改良した自然給水型栽培装置を用いた高糖度ミニトマトの栽培技術	従来のスプレーポニック栽培装置を蒸散に応じて給液する栽培装置（改良型 NSP 栽培装置）に簡易に改良し、高糖度のミニトマトを多収生産する。
3	ドローンを活用した分施肥系	センシング用ドローンを用いたハナエチゼンの適正穂肥診断技術を確認した。推定生育量から穂肥指標に基づき適正穂肥量を診断することができる。

(3) 登録品種・特許等

1) 品種登録・特許等出願の状況

1. 品種登録出願

特許等出願はない。

2) 保有する登録品種・特許等知的財産一覧

1. 品種の登録

品 種 名	植物の種類	品種登録年月日	登録番号
福太夫	うめ種	平成 17 年 3 月 23 日	1 2 9 8 5
オータムヴィオレミニ	らっきょう種×きいいとらっきょう種	平成 19 年 3 月 2 日	1 4 9 9 3
イクヒカリ	稲種	平成 19 年 3 月 15 日	1 4 9 9 9
ニューヒカリ	稲種	平成 21 年 7 月 31 日	1 8 3 4 9
まんぷくもち	稲種	平成 22 年 2 月 19 日	1 9 0 5 3

あきさかり	稲種	平成23年3月2日	20431
いちほまれ	稲種	令和2年12月9日	28234
さかほまれ	稲種	令和5年1月18日	29497

2. 品種の登録出願中

品 種 名	植物の種類	品種登録出願年月日	出願番号
福井1826号	トマト種	令和2年4月2日	34622
越南300号	稲種	令和2年4月2日	34623
福井1832号	トマト種	令和2年4月2日	34624
シャインパール	稲種	令和4年4月4日	36206
新福1号	稲種	令和4年9月13日	36440
福井15106号	ブドウ	令和6年未定	

3. 特許の取得

発明の名称	特許登録年月日	特許登録番号
電子レンジとポリエチレン袋を用いた低コスト植物無菌培養方法	平成19年9月14日	4009685

2. 研究の概要

I 戦略的研究開発事業

(1) 安定良食味な水稻早生品種の開発 (H30～R6)

品種開発研究部 水稻育種研究G 中岡史裕

昨年度選抜した5系統を圃場での生産力検定試験および各種特性検定試験（高温登熟性、いもち病真性抵抗性遺伝子型、葉いもち圃場抵抗性、穂いもち圃場抵抗性、穂発芽性、耐冷性、胴割れ耐性、白葉枯病抵抗性）、食味官能試験に供試した。作物研究Gおよび奨励現地試験のデータも参考にして有望な2系統を選抜し、越南315号、越南316号と命名した。2系統および対照品種「ハナエチゼン」、「ひとめぼれ」および「つきあかり」について、品種登録出願に必要な形質データを取得した。

(2) 病気に強く省力生産できるミディトマト新品種の育成 (R2～R6)

品種開発研究部 園芸育種研究G 堀口芽以

葉かび病抵抗性遺伝子を導入した品種については、場内では昨年度選抜した系統を中心に規模を大きくして選抜を行った。現地試験を土耕栽培で3ヶ所、養液栽培で1か所実施した。場内および現地試験の結果から2系統選抜した。

単為結果性遺伝子を導入した品種については、F1系統の親を固定するため、戻し交雑を行い、世代を進めた。Pat-2由来の系統については、3系統の親の固定が完了した。W2939由来の系統については、3系統をBC5まで、1系統をBC4まで完了した。

Ⅱ 地域科学技術振興研究事業（地域産業・技術振興課）

（１）ＩＣＴ情報を活用した水稲自動可変施肥とスポット除草技術の確立（Ｒ３～Ｒ５）

次世代技術研究部 スマート農業研究Ｇ 藤田純代

空撮画像からハナエチゼンの幼穂形成期の生育量を推定するモデル式を作成し、適正穂肥量の診断技術を確立した。この診断技術を用いて現地実証を行った結果、慣行栽培である全量基肥施肥（一括肥料）栽培と比較し、収量は 46 kg/10a 増加した（慣行栽培 440 kg/10a 穂肥診断による分施肥栽培 486 kg/10a）。

（２）中山間の未来をうるおす超省力コンパクト園芸の確立（Ｒ５～Ｒ８）

園芸研究センター 野菜・花き研究Ｇ 榊田恭恵

小型パイプハウスを活用した省力園芸体系の確立を図るため、簡易養液栽培システムの設計・開発を行うとともに、効率よく簡易養液栽培システムを活用できる小型パイプハウスの設計を行った。

簡易養液栽培システムの開発では、発泡ベンチの形状、培地の入れ方について検討を行った。３種類の形状の発砲ベンチを用いてミニトマトを栽培し、生育調査、収穫調査を行い、その結果、生育に違いみられなかったが、収量はタイプＡが多い結果となった。また、発泡ベンチへ培土を流し入れる場合と、不織布ポットに入れて発砲ベンチに置く場合の比較を行った。初期の生育には差は見られなかったが、後半になるとわずかに不織布ポットの方が劣る程度だが、収量は培土を流し入れた方が多くなった。次年度は、発泡ベンチＡタイプで、培地を流し入れ、ミニトマト以外の品種も栽培試験を行う。また、問題点として、夏季栽培時の培地や養液の温度が高くなることから、昇温抑制対策もあわせて検討を行う。

天井部のフィルムを開閉できるフルオープンを導入した小型パイプハウス（間口 3.6m、奥行 30m）の建設を行い、耐風対策の検討を行った。次年度は、夏期におけるハウス内の環境や強度について検証を行う。

（３）直売所に広めるくだもの栽培技術の確立（H31～Ｒ５）

園芸研究センター ウメ・果樹研究Ｇ 田中裕介

キウイフルーツの品種選定として、結実(雌)品種 7 品種と花粉(雄)品種 3 品種の品種比較を実施した。

樹体生育特性では、黄色系品種は花芽着生数、着花数、新梢発生数が多く、緑色系品種は新梢の伸長が長かった。開花期間はどの品種も 4 日～5 日程度であった。‘東京ゴールド’花芽着生数、主枝からの新梢発生数が多く、平均新梢長も長いことから結果母枝の確保が容易で、栽培しやすい品種だと考えられた。

花粉(雄)品種の開花特性では、花芽着生数、着花数も多く花蕾の確保がすしやすく、開花期間の長い‘孫悟空’、または、生花数あたりの葯量が多いため、花蕾採取の効率が良く、花粉量も多い‘トムリ’が花粉採取用雄品種として有望であると考えられた。

花粉(雄)品種と結実(雌)品種の適合性では、どの品種も結実率が 90%以上となり、果実品質にも影響はなかった。‘孫悟空’、‘トムリ’は開花期間が長く、特に‘孫悟空’は多くの結実品種と開花期が重なったため、花粉採取用雄品種として有望であると考えられた。

品種による収穫適期の違いでは、赤・黄色系品種は 9 月下旬～10 月下旬、緑色系品種は 11 月上旬～11 月下旬に収穫適期となった。早生品種の‘紅妃’、‘イエロージョイ’は果実硬度の低下が早く、収穫適期が 10 日程度と短かった。緑色系品種は果実硬度の低下が遅く、収穫適期期間が 30 日程度と長かった。

ホルクロルフエニロン液剤処理の効果検討では、黄色系品種の‘イエロージョイ’、‘東京ゴールド’でも肥大効果があり、果実重が約 40%増加した。緑色系品種の‘ヘイワード’と比べて肥大率も大きいため、黄色系品種はホルクロルフエニロン液剤に対する感受性が強いことが示唆されたが、‘イエロージョイ’では糖度が低下する等、果実品質の低下を招いた。

授粉方法の違いが果実品質に及ぼす影響では、液体授粉は授粉作業時間が短い花粉使用量が多く、果実も粉末授粉と比べ

るとやや小玉化する傾向があった。粉末授粉は授粉作業時間が長い花粉使用量を抑えることができ、希釈倍率が 15 倍でも加重や果実品質に大きな差はなく、良質な果実を生産しやすいと考えられた。

貯蔵温度の違いが果実品質に及ぼす影響では、赤・黄色系品種の未追熟果を 5℃で冷蔵貯蔵した場合は、貯蔵 60 日までは追熟後の果実品質は低下せず、1℃で貯蔵した場合は貯蔵 120 日でも追熟後の果実品質は低下しなかったため、より低温で貯蔵することで貯蔵期間を長く保つことができると示唆された。

エチレン処理後の追熟日数が果実品質に及ぼす影響では、エチレン処理後に冷蔵で追熟すると、果肉硬度の低下が小さく、適熟期間が赤・黄色系品種では 25 日程度、緑色系品種では 40 日程度となり、エチレン処理後も長期間、果実品質を保つことが示唆された。

結果母枝の太さの違いが果実品質に及ぼす影響では、結果母枝の基部径の太さの違いによって糖度や酸度、果実硬度等の果実品質に影響は無かったが、基部径が 10mm 未満だと果重が小さくなる傾向にあったため、毎年安定した果実を収穫するためには、基部径が 10mm 以上の結果母枝を剪定時に残す必要があると考えられた。

品種の違いが果実品質に及ぼす影響では、花芽の着生数が多い品種では、結果母枝あたりの着果数が多くなる傾向にあり、着果数が多いと、果重が小さくなることが示唆されたため、結果母枝長に対して、適正な着果量を保つ必要があると考えられた。

栽培方法の違いが生育量、管理作業時間に及ぼす影響では、つり上げ方式の栽培方法では、新梢の伸びが良く、新梢径も大きくなるため、樹冠の拡大や、良質な結果母枝の確保がしやすいことが示唆され、管理作業時間も少なくなるため、省力的な栽培ができると考えられた。

(4) ウメの超省力・スマート果樹栽培体系の確立 (R5～R10)

園芸研究センター ウメ・果樹研究G 野崎 直・野尻智洋

地面に接触しない新たなネットの配置を試行した。収穫の実現性は確認できたが、集荷効率をどうやって向上させるか、直射日光による果実の劣化対策が課題となった。また、アカマダラケシキスイの被害が皆無ではないことが明らかとなった。次年度は、ネットの素材も含めて検討を行う。新たな樹形と側枝管理の開発を目的に、明後年用 15cm 予備枝を配置し樹体間の生育差の修正を開始した。除去量 25%/樹を目安に下枝から樹形改造を開始した。太枝を除去する時期は秋季が良い感触を得た。

新梢伸長本数と新梢長と収量に有意な相関があることが明らかとなった。

灌水がウメの生育に与える影響について露地試験とポット試験で調査した。露地試験では、5月下旬～9月下旬の期間にテンシオメーターの計測したpF値が2.7以下の日に灌水を実施した。灌水区では9月の葉の新鮮重が対照区より高く、9～11月の葉中窒素濃度も対照区より高く推移した。花芽密度についても対照区より高い値であった。ポット試験では、6月上旬～9月下旬の期間に灌水を開始するpF値を1.5, 2.0, 2.5の3段階に変え、各試験区の生育を調査した。湿潤に管理した試験区ほど、幹周の生育が優れ、新梢長、新梢本数が多いという結果が得られた。花芽密度については、湿潤に管理した区ほど低い傾向にあった。しかし、結果枝の長さや花芽密度から樹ごとの花芽の総数を計算すると花芽の総数は湿潤で管理した区ほど高かった。結果から夏場に灌水を行うことで新梢や幹の栄養生長を旺盛にすること、露地試験のように成長障害点付近での灌水は花芽の着生に効果があるが、ポット試験のようにpF値が2.0以下まで湿潤に管理することで花芽の着生が抑制される可能性が示唆された。

(5) 一年中おいしい‘越のルビー’を生産する低段密植栽培技術の開発 (R3～R6)

園芸研究センター スマート園芸研究G 山形惇平 藤田雄大

低段密植栽培において周年安定して糖度 8° 以上の果実を生産する技術を確認するため、NSP 栽培装置（自然給水型、ヤンマーグリーンシステム）およびうるおい力持ち（植物重量モニタリング給液型、山本電機）を用いて、4月、8月、12月定植の年3作で収量および品質を調査した。全ての調査において‘華小町’を供試した。

NSPを用いた栽培においては、栽植密度および養液ECの違いが収量および品質に及ぼす影響を調査した。4月定植分において

は、栽植密度（株/10a）8,500、養液EC（dS/m）1.3、2.0、3.0、1.3→3.0（花房開花に伴い上昇）の4区で比較した。その結果、栽植密度（株/10a）8,500：養液EC（dS/m）2.0の場合に最も多く糖度8°以上の果実を収穫でき、1.2t/10aであった。8月定植分においては、栽植密度（株/10a）：8,500、6,000、養液EC（dS/m）：1.3、1.6、2.0、2.5の計8区で比較した。その結果、いずれの区においても糖度8°以上の果実収量は0.1～0.3t/10aであった。12月定植分においては8月定植分と同様の試験区で調査中である。

うるおい力持ちを用いた栽培においては、栽植密度および給液タイミングの違いが収量および品質に及ぼす影響を調査した。4月定植分においては、栽植密度（株/10a）：10,000、給液タイミング（%）：95、85の計2区で比較した。その結果、糖度8°以上の果実収量は、給液タイミング85%の場合に1.1t/10a、95%の場合に0.8t/10aとなったが、有意な差はみられなかった。8月定植分においては、栽植密度（株/10a）：8,300、10,000、給液タイミング（%）：95、85の計4区で比較した。その結果、いずれの区においても糖度8°以上の果実収量は0.1～0.3t/10aであった。12月定植分においては8月定植分と同様の試験区で調査中である。

いずれの栽培装置においても、水分ストレス付与により糖度8°以上であるが20g未満となる果実が発生し、糖度8°以上かつ20g以上の果実を多く収穫できなかったため、このような果実をより多く収穫できる手段の検討が必要である。次年度は、今年度行った試験結果から周年の果実の収量および品質の傾向を把握し、最適な栽培条件を絞っていく。

併せて、低段密植栽培では大量の苗が必要となるため、今年度は多穴セルトレイを使用した苗の生産性の向上と、低段密植における2本仕立て栽培による苗数低減を検討した。

多穴セルトレイの検討では、固化培土とロックウールの培地を比較することと同時に試験した。128穴セルトレイの固化培土は、72穴セルトレイのロックウールと同等の品質の苗を育てることができ、発根不良も少なく、苗の生産性を高めることができた。

また、低段密植における2本仕立て栽培の検討では、栽植密度を慣行の8,500株/10aから0.5倍の4,250株/10aに設定し、収量や果実品質を比較した。果実品質には慣行と比較して有意な差は見られなかったが、今回の栽植密度では可収収量は慣行よりも20%減少した。しかし、株間をさらに狭める余地があると考えられるため、今後は栽植密度を慣行の0.75倍程度で試験する。

（6）夏季の異常気象に対応できる白ネギ生産技術の確立（R4～R6）

園芸研究センター 野菜・花き研究G 寺下貴晃

夏扇パワー（cp303、2粒/穴、9/中収穫）において、灌水時期、灌水量、要灌水点をかえて試験を実施した。今年のような猛暑では、高温乾燥による生育停滞やその他要因（特に高温により発生が助長される病害虫）の影響が強く、灌水により多少の生育向上にはなっても、最終的な収量向上への影響は見込めなかった。一方で、収穫時期の前進化、品種や粒数の変更により、灌水による収量向上効果を見込める可能性が示唆された。次年度は、それらの組み合わせを検討したい。

ブルスターやハイクリブームに取り付け可能な灌水用ノズルを試作した。昨年度は、生育後半の灌水時に、ノズルが白ネギにぶつかるという物理的な問題が発生したが、新たに改良したタイプのノズルでは、生育期間を通して、白ネギの株元に局所的な灌水が可能となった。次年度は、灌水だけでなく灌注処理にも対応できるよう改良を重ねたい。

（7）甘い！大きい！福井オリジナルイチゴ新品種開発と多収技術確立（H31～R6）

品種開発研究部 園芸育種研究G 中村美香

これまでに選抜した4系統を、場内圃場へ16株×3反復定植し、収量や糖度、品質、生育状況等の各種調査を行った。また、現地3ヶ所にて栽培試験を行い、場内試験結果と合わせて2系統を選抜した。

現在選抜中の4系統について、3月から株元へのCO2局所を行い収量や生育に与える影響を調査中である。

(8) 緑肥等を組み合わせた持続可能な水田利用体系の確立(R5～R8)

品種開発研究部 作物研究G 岩岡悠太郎

田野井 真

企画・指導部 経営研究G 大塚美鈴

・緑肥関係

令和4年11月に圃場の土を採取後、本県における越冬型の緑肥栽培作型に合う品種を探すべく、ライ麦2品種、ヘアリーベッチ2品種、ペルシアンクローバー1品種を栽培し緑肥の分析と土壌調査を行った播種した。遅くまで生育をさせればヘアリーベッチは2品種平均で窒素10.8kg/10a、カリ11.4kg/10aを吸収し、ライ麦はカリ9.0kg/10a程度を吸収し圃場に返すことができることが確認された。

・子実トウモロコシ関係（経営調査含む）

熟期の異なる子実トウモロコシ3品種を栽培し、本県での生育や収量について調査した。今回栽培した品種は生育期間の長い順に34N84(RM108)、36B08(RM106)、P9027(RM93)の3品種を用い熟期の確認、収量性の確認を行った。生育期の長いRM108が収量的には一番多かったが、夏季の干ばつ等の要因で収量は思っていたほど上がらなかった。

3つの異なる施肥体系で子実トウモロコシを栽培した。化成肥料100%、化成肥料:鶏ふん50%:50%、化成肥料:鶏ふん30%:70%の区を設け収量性の調査を行った。化成肥料100%区の収量が一番高くなり、鶏ふん70%の区は生育、収量ともに劣った。

子実トウモロコシを生産している県内唯一の経営体において、子実トウモロコシの作業時間と経済性を調査した。作業時間は2.81時間/10aと短く、薬剤散布も除草剤散布が2回、殺虫剤散布が1回で済むことから、省力的な生産が可能である。しかし、子実トウモロコシのみで利益を出すためには、面積拡大や収量の増加、生産費の低減が必要である。

・大豆関係

石灰質資材（以下石灰）の施用量（0、100、200kg/10a）とリン・カリ（以下PK）の増施が収量に与える影響について検証した。

今回の試験条件下において、石灰施用による精子実重への影響は認められなかった。石灰施用前でもpHが5.99と高く、施用による効果が表れにくかったものと考えられた。

PK増施による収量への影響については、今回の試験では明らかとならなかった。

Ⅲ 提案型共同研究（R5）

(1) キュウリの土壌病害虫対策としての低コスト隔離栽培技術の確立

園芸研究センター 野菜・花き研究G 澤崎光希

防根透水シートを埋設して隔離栽培を行い、土壌消毒剤の効果が十分に発揮されている部分に根域を制限することで、ネコブセンチュウ被害程度の低減が可能かどうか検討した。慣行区（シート埋設無し、土壌消毒有り）では掘り上げた根のおよそ半数にゴールの着生（ネコブセンチュウの寄生）が確認されたが、シート埋設区では確認されず、土壌中のネコブセンチュウ頭数も慣行区のおよそ30分の1程度となったことから、シートの埋設により、慣行区よりもネコブセンチュウ被害の低減が可能と考えられた。

防根透水シートの埋設により根域が制限されることで、養水分の吸収等に悪影響を与える可能性があるため、根域として利用可能な培地量の違いが生育や収量に与える影響について検討した。シート埋設①区（培地量約32L）では慣行区と比較して劣るものの、シート埋設②区（培地量約86L）では慣行区と同等の生育および規格内品収獲量が確保可能と考えられた。また、培地量が制限されたことによる規格外品割合の増加は見られず、品質に関しても慣行と同程度であると考えられた。

(2) タマネギの収量安定に向けた追肥技術の確立

園芸研究センター 野菜・花き研究G 澤崎光希

タマネギ品種‘ターザン’((株)七宝)を用いて、球を十分に肥大させつつ、収穫および出荷期まで健全球を多く保つために適切な総追肥窒素量を検討した。定植時期について3水準(10月25日、11月7日、11月14日)と追肥窒素量について3水準(16.0 kg/10a、12.8 kg/10a、9.6 kg/10a)を設定し試験を実施した。総追肥窒素量を減らすほど4月上旬以降の地上部生育および追肥開始以降の体内窒素濃度が若干低く推移する傾向がみられたものの、慣行比20%の減肥(12.8 kg/10a)であれば慣行と同程度の球径および球重となると考えられた。定植時期が早いほど収穫後の腐敗球数が増える傾向がみられたが、総追肥窒素量や追肥時期の違いによる腐敗球数への影響は判然としなかった。

肥大不足や抽苔発生要因の一つである窒素欠乏を防ぐため、追肥時期および追肥回数についても試験を実施した。りん茎の肥大不足や抽苔発生は2月下旬以降の体内窒素濃度の低下に関連しており、特に3月中旬以降の低下の度合いを抑制することが重要であることが示唆された。特に抽苔発生を防ぐためには4月上中旬ごろの体内窒素濃度が2%を下回らない施肥管理が必要であると考えられる。また、その際の総追肥窒素量は10 kg/10a程度で十分に肥大不足や抽苔の発生を抑制できる可能性が示唆された。収穫後の腐敗に関しては総追肥窒素量試験と同様の結果となった。

(3) ナシ改植における早期成園化に適した苗木管理技術の確立

園芸研究センター ウメ・果樹研究G 田中裕介

ナシ改植における早期成園化に適した苗木管理技術として、不織布ポットによる苗木養成方法を検討した。不織布ポットで苗木を養成することで、養水分を吸収する役割の細根量が増え、初期生育が促進された。苗木から新梢を4本伸ばした場合の平均新梢長は、地植えと比較して‘幸水’では約1.6倍、‘あきづき’では約1.8倍増加した。

IV パイロット研究(R5)

(1) 房どりできるミニトマトの周年出荷体系の開発

園芸研究センター スマート園芸研究G 山形惇平

令和3～4年度に行った「房どりミニトマトを核としたポストコロナ型生産流通体系の実証」において、裂果の少ない品種「TS28017-7s(福井シード)」を供試し、植物体の蒸散に応じて給液するNSP栽培装置(ヤンマーグリーンシステム)による9月定植の冬越し栽培で、収量16t/10a、平均糖度9.6度を得ることができた。7～10月の端境期を解消して周年出荷体制を確立し、既存の農家が高品質なトマトを生産できるようにするため、本年度は従来のスプレーポニック栽培装置(カネコ種苗)をNSP栽培装置と同様に蒸散に応じて給液する栽培装置(改良型NSP)に簡易に改良し、「TS28017-7s」と組み合わせることで高糖度なミニトマトの多収生産を図った。この結果、4月定植の夏越し栽培において、スプレーポニック栽培と同等の収量および品質となり、生育後半より糖度が高くなり単価向上および利益向上が見込めた。また、半促成栽培と抑制栽培を組み合わせることで、スプレーポニック栽培と同等の品質でかつより高い収量を確保でき、夏越し栽培と従来の冬越し栽培を組み合わせることで周年出荷に繋がれると考えられた。本研究を令和6年度の指導活用技術として取りまとめた。

V 現場移転促進(フォローアップ)を図る開発技術(R5)

(1) 越前スイセンの球根養成における省力化栽培技術の確立

園芸研究センター 野菜・花き研究G 長谷亘真

越前スイセンの球根養成における肥大に適した追肥量・追肥時期の検討及び栽培の省力化技術としてネット栽培について試験を行った。追肥量は慣行、1.5倍、2倍の3水準、追肥時期は慣行(2月中旬)、2月下旬、3月中旬の3水準を設定した。追肥量の試験については慣行と2倍量について現地養成圃場(福井市笹谷町)でも試験を行っている。現在も栽培を行ってお

り、来年度の6月に掘り上げ予定である。

ネット収穫は園芸研究センターでは網目の違いが生育に及ぼす影響を調査するため12mmと6mmのネットを使用して試験を行っている。また、生産者にもネット栽培を見てもらうため、越前町と福井市の球根養成圃場にてネット栽培試験を実施している。現在も栽培を行っており、来年度の6月に掘り上げ予定である。

VI 予備試験（R5）

（1）高温登熟耐性に関する育種素材の育成

品種開発研究部 水稻育種研究グループ 小林麻子

若狭湾エネルギー研究所で炭素イオンビームを種子に照射した。得られたM1世代を圃場で栽培した。成熟期にそれぞれ500個体（計2000個体）のM2種子を取得した。次年度のRNAサンプリングに向け、福井県立大学とサンプリング時期および方法の検討を行った。また、極多収の2品種にも炭素イオンビーム（LET150、30グレイ）の照射を行った。

（2）小ギク栽培における環境にやさしい省力栽培技術の確立

園芸研究センター 野菜・花き研究G 長谷亘真

盆咲き小ギクにおける県内栽培品種55種類について、開花時期調査を実施した。今回の試験では全ての品種で開花時期が通常よりも早く、草丈が短い結果となった。これは、小ギクは育苗段階から開花時期の影響を受けると言われており、前年度の育苗段階で高温に遭遇した可能性があると考えられた。来年度は現場で栽培されている品種を選定し再度開花時期の調査を行いたい。

収穫作業の省力化については手収穫、チップソー、剪定用バリカンによる収穫作業の比較を行った。チップソー及び剪定用バリカンでも収穫は可能であり、剪定用バリカンの方が切り口付近の損傷が少ないことや安全面から収穫には適していると考えられる。しかし、収穫時に茎が曲がっている場合には刃が茎に引っかかるため、機械での収穫の際は栽培管理も重要になると考えられる。

（3）ブドウの早期収穫技術の開発

園芸研究センター ウメ・果樹研究G 田中裕介

シャインマスカットにおける環状剥皮処理が果実品質に及ぼす影響を調査した。満開30日後に結果枝基部及び結果枝の第一果房直下部に環状剥皮処理を行ったが、糖度上昇が早まる等の成熟期が促進される効果はみられなかった。来年度は処理時期や処理幅等の検討が必要であると考えられた。また、来年度以降の試験に使用するシャインマスカットの苗木を購入した。

（4）無加温で盆前出荷できるブドウ早生新品種の育成

品種開発研究部 園芸育種研究G 坂川和也

交配のための除雄や花粉採取について効率的な作業手順等を検討するとともに、4通りの組み合わせでの交配を実施した。また、重イオンビーム照射による有用形質獲得を目指し、ブドウ緑枝への照射条件等の検討を行った。カーボンの照射線量が10Gy以上では発芽後の展葉率が低下した。

VII その他事業（R5）

(1) 病害虫発生予察事業（国庫）（S25～）

病害虫防除室

1) 水稻病害虫

本年の作況指数は98の「やや不良」、上位等級比率は「ハナエチゼン」が約94%、「コシヒカリ」が約85%であった。「いちほまれ」は、約1,500haで栽培された。水稻栽培における直播面積は約3,215haと前年より約100ha増加した。湛水土壤中播種が約2,800haを占めている。

福井県特別栽培農産物認証制度における水稻栽培面積は、約1,154haで前年より約22ha増加した。

苗立枯病(並)

育苗期間中の温度管理や水管理の不備によるものと思われるムレ苗やカビ類が散見された。細菌性病害ではもみ枯細菌病がやや多い発生であった。

葉いもち(並)

7月1半旬に常発地での発生が見られ、その後7月2半旬に全般発生となり、7月5半旬に最盛期となった。7月中下旬の気温は高く、降水量は少なかったため、進展は少なかった。

穂いもち(早生 少、中晩生 少)

初発期は早生が8月1半旬、中晩生が8月3半旬とともに平年並みであった。葉いもちの発生が少なかったことに加え、7月下旬～8月上旬の気温がかなり高く、降水量は少なくその後も高温少雨で穂いもちの進展に適していなかった。

紋枯病(少)

初発期は平年並みの7月1半旬であり、7月5半旬には全域で発生し、8月中旬には垂直進展が認められた。前年の発生が多かったため、伝染源は多かったと考えられるが、8月の降水量がかなり少なかったため、発生は少なかった。

ごま葉枯病(多)

河川沿い等の低地力圃場での発生が多かった。高温乾燥が続いたことによる肥切れの影響が大きいと思われる。

イネミズゾウムシ(やや多)

本田侵入初期が5月3半旬と、田植直後から発生が見られ、6月下旬にかけて発生のピークが見られた。越冬量が多かったと思われ、5月中旬の気温が高く、本田侵入に好適であった。

ニカメイチュウ(第1世代 やや多、第2世代 多)

フェロモントラップによる越冬世代成虫の発生最盛期は5月6半旬と平年並みであった。本田の幼虫被害は6月1半旬から見られ、6月3半旬に加害盛期となった。前年の第2世代の発生が多く、越冬にも好適な条件であったため、越冬密度は高かった。6月～7月の気温が高めに推移したため第1世代成虫の発生が早まった。

第1世代成虫の発生最盛期はフェロモントラップ調査で7月3半旬と平年より早く、幼虫による加害初期は7月5半旬、加害盛期は8月2半旬となった。幼虫の発育が進んだことで、被害も拡大した。

斑点米カメムシ類(多)

本田侵入初期は6月5半旬、加害盛期は早生が7月4半旬、中晩生が8月1半旬と平年より早くなった。水田周辺雑草地での生息密度は6月下旬は平年より少なく、7月上旬は平年並みであった。7月中旬の早生出穂期における本田内の発生量は平年より少なかった。7月下旬以降気温が高く、降水量が少なくなり、カメムシの発育に好適となった。主要種はアカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシであった。

イナゴ類(多)

幼虫発生初期5月3半旬、加害盛期6月5半旬で、平年より早かった。一部の地域で特に多い発生となり、一部9月中旬まで発生が見られた。

その他、イネゾウムシ、イネドロオイムシ、イネハモグリバエ、イネヒメハモグリバエの発生は少なかった。ツマグロヨコバイの発生は並み、セジロウンカの発生は少、ヒメトビウンカの発生はやや少であり、トビロウンカの発生は確認され

なかった。イネアオムシ、イネツトムシ、コブノメイガの発生は少なかった。

2) 大麦・大豆・ソバの病害虫

①大麦

出穂期は、平坦部で4月中旬頃、山間部で5月上旬頃と平年より早かった。

赤かび病の感染時期である開花期頃および登熟期に連続した降雨はなく、赤かび病は少発生であった。

その他の病害虫では、株腐病が中山間地を中心に散見されたが、少発生、雪腐病の発生が中山間の積雪の多い所で散見されたが、少発生であった。

②大豆

栽培品種は、「里のほほえみ」が増加し、「エンレイ」は坂井地区などの一部で栽培されている。

葉焼病は7月中旬から発生し、9月中旬に最盛期となったが発生および被害程度の圃場間差が大きかった。

フタスジヒメハムシは6月中旬から発生が見られはじめ成熟期まで発生が見られて、一部多発生の地域もあったが、全体としては平年並みであった。ウコンノメイガは全体に少発生であった。ハスモンヨトウのダイズでの発生は局地的に多く、カメムシ類の圃場での確認は少なかった。一部ハダニにより葉の黄化が散見された。

③ソバ

一部の地域で8月下旬にアブラムシが多発した。ハスモンヨトウも多発生であったが大きな被害はなかった。

3) 野菜・果樹・花卉の病害虫

①野菜

スイカの炭疽病は、6月中旬頃から発生し始め、6月～7月上旬の多雨の影響で多発生であり、つる枯病も多発生であった。アブラムシ類、ハダニ類は、6月～8月下旬まで発生がみられたが、少発生であった。

トマトの灰色かび病は、半促成栽培で4月4半旬頃から発生し始めたが少発生であった。抑制栽培での発生も少なかった。葉かび病うどんこ病も少発生であった。青枯病は、局中発であった。タバココナジラミ等コナジラミ類、アザミウマ類の発生は少なかった。

キュウリのべと病は、半促成栽培、抑制栽培ともに少発生であった。うどんこ病は、半促成栽培、抑制栽培ともに少発生であった。一部褐斑病や斑点細菌病が見られたが少発生であった。アブラムシ類、ハダニ類は少発生であった。抑制栽培の一部で、コナジラミ類やセンチュウ類が多い所があった。

ネギのさび病は少発生であった。8月中旬以降、軟腐病、褐色腐敗病、白絹病の発生が増加した。一部萎凋病が多発した地域があった。ハモグリバエ類、アザミウマ類の発生は全体に少なかった。シロイチモジヨトウは局多発であった。

アブラナ科野菜では、初夏どりのブロッコリーで一部黒すす病が多発した。秋冬どりではハスモンヨトウ、ハイマダラノメイガの発生が多発し、コナガ、アオムシは少なかった。

ハスモンヨトウはフェロモントラップにも多く誘殺され、ハウスのハウレンソウでは11月まで発生が続いた。ラッキョウの、さび病、ハモグリバエ類、ネダニ類の発生は少なかった。

②果樹

ウメの黒星病の果実初発は5月下旬で、平年並みであった。一部の農家では適切な薬剤散布を実施していても多発生しており、一部耐性菌が発生している疑いがある。かいよう病は、平年並みの5月2半旬に初発が見られ、降雹や強風によりやや多い発生となった。灰色かび病は平年並みの発生であった。ウメシロカイガラムシ第1世代の孵化最盛期は4月25日であり、平年より2週間ほど早かった。第1世代の孵化期が低温多雨となり、発生が抑制され、平年並みの発生であった。コスカシバは、高齢樹や特定の品種で増加傾向にあり、平年よりやや多い発生であった。モンクロシャチホコに発生は並みであった。ナシの黒星病は、4月から幼果や葉柄に発生が見られ、5月以降増加し、特に豊水、幸水での裂果の発生が目立ち、多発生であった。赤星病は6月上旬に初発が見られたが、発生の増加は見られず少発生であった。アブラムシは6月以降、ハダニは7月以降に多くなった。カメムシ類、シンクイムシ類の被害は少なかった。

カキの炭疽病の発生は7月中旬に見られたが少発生であった。カメムシの吸汁被害果10月以降多発し、クサギカメムシが多く、チャバネアオカメムシも見られた。

ブドウの黒とう病が6月以降より発生し、7月上旬に房にも発病が見られたが、袋かけにより果実被害は少なかった。一部で晚腐病、うどんこ病の発生が見られた。ダニ類、コガネムシ類、アブラムシ類が一部で発生した。

【園研】

ウメの黒星病は、平年並みの5月4半旬から発生がみられた。発生量は平年並みであったが、一部で適期に薬剤散布を行っているにもかかわらず多発した。かいよう病は、5月1日に降雹があり、発芽の遅い品種で多発した。灰色かび病の発生は平年並みであった。ウメ輪紋ウイルスは、発生が確認されなかった。ウメシロカイガラムシは、第1世代は平年並みの発生であったが、第3世代で発生が増加した。コスカシバは、高齢樹や特定の品種で増加傾向にあり、平年より早い4月下旬から幼虫の食害が確認された。モンクロシャチホコは、7月上旬から10月上旬まで若齢幼虫が確認され、発生期間が長期化した。

③その他

新たに発生が確認された病害虫

7月にトマト養液栽培施設においてトマト立枯病の発生を確認した。

10月にはトマトキバガ侵入調査用のフェロモントラップにトマトキバガ成虫が誘殺された。本虫による農作物での発生および被害は確認されていない。

(2) 病害虫防除所運営事業(国庫) (S26～)

病害虫防除室

病害虫発生予察の精度を高め、効率的な防除を推進するために、40名の病害虫防除員を設置し、いもち病、紋枯病、斑点米カメムシ類の発生状況調査を行った。病害虫発生状況調査を基に、病害虫発生予察情報を発表し、防除指導を行った。また、農薬販売業者について指導、取締りを行った。

(3) 農薬抵抗性検定事業(国庫) (S52～)

1) キュウリうどんこ病の薬剤感受性検定(国・県) (R5)

次世代技術研究部 生産環境研究G 横山康幸

県内11圃場から採集したキュウリうどんこ病菌11菌株について、薬剤添加培地上で感受性検定を行った。トップジンM水和剤、アフエットフロアブル、ストロビーフロアブル、トリフミン水和剤について調査を行った。

2) キュウリアブラムシ類の薬剤感受性検定(国・県) (R5)

次世代技術研究部 生産環境研究G 小島孝夫

キュウリから採取したワタアブラムシについて、ベネビアOD、マラソン乳剤、ベストガード水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤について、食餌浸漬法により常用濃度における薬剤感受性の調査を行った。

(4) 減農薬防除体系実証事業(国・県) (R4～R6)

次世代技術研究部 生産環境研究G 富田浩治

ネギの条間にリビングマルチのオオムギを播種時期を変えて播種し、ネギハモグリバエの被害軽減が図れるか調査した。収穫時の被害度では、無処理区と被害度の差は無かった。

ネギを赤色ネットで覆うとネギハモグリバエの被害は少なくなり、ネギ圃場周囲を赤色ネットで囲うことでもネギハモグリバエの被害が少なくなった。

(5) 重要病害虫等侵入警戒調査事業（国・県）H26～

病害虫防除室

1) コドリンガ

令和5年5月から10月までの期間、福井市寮町農業試験場内ナシ園近くにフェロモントラップを設置し調査を行ったが、本虫は確認されなかった。

2) トマトキバガ

令和5年6月から11月および令和6年3月に福井市寮町農業試験場内および美浜町の園芸研究センターに、9月からはあわら市の園芸カレッジおよび福井市下市町の各トマトハウス近くにフェロモントラップを設置し、調査を行った。

10月12日に名古屋植物防疫所が福井市場、敦賀港湾に設置したトラップに疑義虫の誘殺が確認され、同定の結果、トマトキバガであると確認された。その後、県内各地に設置したトラップにもトマトキバガの誘殺が確認された。しかしながら、栽培トマト等農作物での発生および被害は確認されていない。

3) 火傷病

令和5年4月から11月までの期間、農業試験場内ナシ園場において見取り調査を行った結果、調査期間中に火傷病は確認されなかった。

また、中国において火傷病の発生が確認され、なし現場において中国産花粉を使用していたことから、県内への侵入が懸念されたため、農家在庫として所有する中国産花粉の所有状況と処分指導、および緊急の現地調査を実施した。

4) スイカ果実汚斑細菌病

令和5年4月から8月までの期間、あわら市、越前市のスイカ栽培圃場において茎葉および果実の発病調査を行った結果、調査期間中に果実汚斑細菌病は確認されなかった。

5) ウメ輪紋ウイルス

令和5年6月および7月に南越前町、小浜市、おおい町、若狭町の現地圃場、7月に果樹母樹園地・果樹用苗生産園地の見取り調査を行い未発生を確認した。また、果樹母樹園地・果樹用苗生産園地のサンプルについては、名古屋植物防疫所でイムノクロマト法等で分析を行い陰性が確認された。

6) 水稻各病害

（イネミイラ穂病菌、イネクキセンチュウ、その他日本に産しない各種の検疫有害動植物であってイネを害するもの）

令和5年5月から9月までの期間、農業試験場内予察田、坂井市現地圃場において調査を行った結果、各病徴は確認されなかった。

7) キウイフルーツかいよう病

福井市寮町試験場内のキウイフルーツ生産園地内で、令和5年8月2日に全樹を対象に葉の症状を調査した。また、同日に調査株の全枝および主幹の幹部からの樹液の漏出および新梢の変色や枯れ込みの有無を目視で調査した結果、葉および枝でのキウイフルーツかいよう症状は確認されなかった。

(6) 土壌保全対策費（土壌環境基礎調査事業）（S54～）

次世代技術研究部 有機農業研究G 森永一・吉川侑沙

土壌機能実態モニタリング調査事業：農地25地点の土壌の断面調査および化学性・物理性の分析、アンケート調査を実施し、土壌診断および土づくり対策の基礎試料の作成を行った。

基準点調査事業：場内水田圃場に化学肥料単用区、無窒素区、有機物施用区、総合改善区を設けていちほまれを栽培し、稲わらの連用が土壌と水稻の生育に及ぼす影響を調査した。また、畑ライシメーターで①：秋冬キャベツ栽培前の緑肥（ヘイオーツ）の効果について（4年目、品種：Y R 万代→おきな S Pに変更、播種量：15 k g / 10 a → 同10 k g に減）、②：越冬型緑肥であるライムギ：R 007について調査・分析を行った。その結果、①：緑肥の収量は4 / 5、4 / 25播種でDWで0.6 t / 10 a は取れ、

播種量を減らしても播種時期をやや早めることで、これまで（R 3～4）のDWと大きな差はなかった。また、キャベツの収量は4/5緑肥播種区で、3.8 t/10 a、4/25播種区で同4.3 t、無緑肥区で同2.4 tと、無緑肥区は生育後半、根の活性不良によるアントシアン発色が90%以上発生し、大きく減収した。②：R007は4/24刈り込みで、DWで0.8 t/10 aと非常に多く取れ、すき込みにより土壌中のTC、交換性カリウムが増加した。また、三相分布分析からも気相の割合が増え、ヘイオーツより有機物施用効果、土壌の物理性改良効果が良好と考えられた。

農地土壌炭素貯留等基礎調査事業として県内農地10地点（水田9、畑1）および場内基準点調査水田圃場2地点（化学肥料単用区、有機物施用区）の0～30cmの土壌（作土層、第二層）を採取し、土壌炭素貯留量等进行分析するとともに、現地圃場の農地管理実態アンケート調査を実施、まとめ、併せて報告書等を作成して農業環境技術研究所に報告した。

（7）肥料検査登録事業（S51～）

次世代技術研究部 有機農業研究G 森永一・吉川侑沙

肥料の品質の確保等に関する法律に基づき、特殊肥料（牛糞堆肥）1点について、収去および成分分析を実施した。

（8）奨励品種決定調査事業（S39～）

1）水稻

品種開発研究部 作物研究G 岩岡悠太郎

本県に適する水稻品種選定のため予備試験を実施した（本年度は本試験の実施は無し）。

早生で3系統、中晩生で1系統、晩生で1系統を供試した。また、加工用・飼料用品種候補として9系統を供試した。食用系統はいずれ也多収であった。加工用・飼料用品種は多くの品種で低収となり、次年度も供試を行う予定である。

2）麦類

品種開発研究部 作物研究G 岩岡悠太郎

本県に適する大麦と小麦品種選定のための予備調査を行った。

うるち大麦では、ファイバースノウと同程度の収量性と極めて低い硝子粒率を評価し、北陸皮78号をやや有望とした。

小麦では、全体的に発芽不良気味となり、本年度成績をもって評価することは困難と思われる。その中で、収量性と容積重、タンパク質含有量を評価し「銀河のちから」をやや有望とした。

3）大豆

品種開発研究部 作物研究G 岩岡悠太郎

本県に適する大豆品種選定を行った。本試験の実施はなく、予備試験では8系統を供試した。熟期が「エンレイ」よりやや早く、収量性も高いことから関東155号をやや有望とした。全体的に裂皮や腐敗が目立ち、品質が悪かった。また、多くの品種で昨年同様、熟期が近づくと茎に青みが残る現象（莢先熟による青立ち）が見られた。

（9）原原種・原種ほ設置事業（S38～）

品種開発研究部 作物研究G 吉川嘉一

水稻・麦類・大豆の原種等を生産し、系統維持のための採種をした。原種等の生産実績は、水稻が11品種で原種等13,491kg、大麦ファイバースノウが原種等125kg、小麦福井県大3号が原種等32kg、大豆の里のほほえみが原原種54kgであった。

（10）優良種子生産体制確立（S38～）

品種開発研究部 作物研究G 吉川嘉一

水稻・麦類・大豆の優良種子生産のため、系統栽培では品種特性を確認しながら選抜を行った。生育期間においては異株や雑草を除去し、収穫後は未熟種子や病害汚染種子等を除去し、健全種子の確保に努めた。また、発芽率を調べ、水稻原種およ

び麦類原原種はどの品種も90%以上、大豆は80%以上となり、農産物検査基準および県種子審査基準を満たしていることを確認した。

(11) 水稻生育指標調査(S45～)

品種開発研究部 作物研究G 田野井真

5月2日(連休)移植のハナエチゼン、コシヒカリ、あきさかり、いちほまれおよび5月19日(適期)移植のコシヒカリ、あきさかり、いちほまれについて、生育・収量・品質の本年の気象に対する反応を追跡した。本年の気象は、4月は当初からかなり気温が高く推移したが苗の伸長には大きな問題はなかった。5月は数日周期で天候が変化し、連休明けと下旬にかなりの大雨が降った。6月上旬は雨は多いが平年並みの気温であったが、それ以降9月いっぱいかなり高温で推移し、降水量は少なくなった。日照時間は7、8月にかなり多くなったが、6月、9月は平年並みであった。草丈は全品種で当初は平年並だったが6月以降やや短めとなった。茎数は当初からやや少なく、いちほまれ以外はかなり少なく推移した。幼穂形成期はほぼ平年並み、出穂期、成熟期は全品種平年より早まっていた。収量はあきさかりと適期いちほまれを除き平年並みからやや多収となった。適期コシヒカリ以外は穂数が少なく、連休コシヒカリ以外は登熟歩合が向上していた。倒伏は全体に少なくなった。玄米タンパク含量は適期いちほまれで平年並み、それ以外はやや低くなった。整粒率は高温の影響からか各品種軒並み平年より低くなり、未熟粒、被害粒(胴割)の割合が高くなった。

(12) 主要農作物優良品種育成事業 (県) (R2～)

品種開発研究部 水稻育種研究G 小林麻子

福井県に適する水稻新品種開発のため、国内外の遺伝資源 516 品種・系統(国内の育成地から取り寄せた新配付系統等が 89 系統、澱粉特性変異系統が 32 品種・系統、ラオス等の海外遺伝資源が 16 品種、在来種や改良品種等から成る遺伝解析用集団が 379 品種)を収集し、その栽培特性および食味関連形質等を評価した。有望な品種・系統については交配に用いた。

(13) 農地土壌の炭素貯留能力を向上させるバイオ炭資材等の開発(国庫) (R2～6)

(農林水産研究推進事業委託プロジェクト研究)

次世代技術研究部 有機農業研究G 福島朋行・西端善丸

場内水田および坂井市の水田において水稻を対象にバイオ炭施用試験を行った。バイオ炭を床土に混用して苗を作成した結果、慣行苗と同等の苗が作成でき、移植後の活着も同等であり収量への影響もなかった。苗重量が軽くなり苗運搬の軽労化となった。

圃場へのバイオ炭を連用して投入(1000kg、100kg)したが、無投入の慣行と比べて生育に大きな差はなく収量も減少することなく同等と見られた。

サトイモではバイオ炭施用で生育が向上する傾向があり、収量も5%程度増加した。過年度の試験と同様の傾向であった。

また、サトイモは土壌病害である萎凋病のまん延・被害を低減するため連作を回避している。バイオ炭施用により萎凋病の発病を調査した結果、萎凋病発病を抑制する効果を確認した。萎凋病菌を接種しバイオ炭未施用区の一部は栽培中期ごろから枯死したが、萎凋病菌を接種しバイオ炭施用区では栽培後期まで枯死することはない。

ダイズに対してもバイオ炭施用試験を行った。開花期に根粒菌数が増加し、その影響で収量も増加した。

ネギに対してもバイオ炭施用試験を行った。土壌病害への影響を調査した結果、褐色腐敗病は低下したが、萎凋病は若干増加し、バイオ炭の施用効果は判然としなかった。

(14) 農業分野での衛星データ利用活用手法の確立(R4～R6)

次世代技術研究部 スマート農業研究G 山口泰弘

1) 米の食味推定

県民衛星「すいせん」より得られる植生指数を使って、いちほまれ生産圃場の玄米タンパク質含有量の推測が可能かについて検討した。各農林総合事務所で調査したいちほまれ生育基準圃等 32 ヶ所の栽培方法および出穂期、玄米タンパク質含有量データを用いた。衛星画像は 8 月に不定期に撮影された衛星画像を用い、いちほまれの出穂以降で最も撮影点数の多い画像により解析をした。連休移植および中旬移植、特別栽培米では GNDVI と玄米タンパク含有量には正の相関がみられたが、直播栽培は負の相関となった。

2) 麦の収穫時期予測

福井市寮町および坂井市丸岡町坪ノ内、越前市国中で大麦水分の経時的な測定と衛星による画像解析を行った。昨年に引き続き衛星による NDVI とかなり高い負の相関がみられ、衛星画像による大麦水分の推測は可能であると考えられた。

(15) 北陸新幹線高架橋農作物影響調査事業 (R4～R5)

次世代技術研究部 スマート農業研究G 佐賀泰孝

北陸新幹線については令和 6 年春の金沢―敦賀間開業に向けて、高架橋など鉄道施設が建設された。高架の高さは 11m～18m となり、周辺圃場においてはその高架橋による日照不足のため減収が懸念される。福井県の耕作地は水田が多く、高架橋周辺圃場の大部分は水稻が作付されている。本調査は、北陸新幹線の内、福井県内の沿線で作付けされた水稻に対し鉄道施設に起因する日陰による日照不足が、水稻の生育および収量に及ぼす影響について調査した。調査はあわら市菅野、坂井市舟寄、福井市下筋生田、鯖江市舟枝で行い、高架の高さを h として、高架橋側端直下から 0.5h、1.0h、1.5h、2.0h、2.5h、4.0h (対照) となる地点を東西両側調査した。2 年間の調査結果から、0.5h 区と 1.0h 区で減収が確認された。(R4 0.5h 区 41～61%、1.0h 区 5～41% R5 0.5h 区 20～51%、1.0h 区 5～40%) また、結果については鉄道・運輸機構に報告した。

3. 普及指導業務実績

(1) 県全域の普及指導活動の支援 (福田 成)

1) 普及指導計画に基づく普及指導活動の支援

①普及指導計画の進捗状況および評価への助言

「新 ふくいの農業基本計画」に基づき、収益性の高い農業経営と活力のある農村の実現を目指して普及指導活動を実施した。高度営農支援課は、地域の特徴に応じた農業経営支援部・課の普及指導活動が行われるよう普及指導計画中間検討会、実績検討会および次年度の計画検討会を通し助言に当たった。

調査研究については、全ての普及指導員が普及指導計画に基づき取り組むことから、高度営農支援課では取りまとめにおけるアドバイスや実績検討会を開催した。

令和 6 年 3 月 14 日、福井県農業試験場において、普及指導活動外部評価を開催した。高度営農支援課から「活力ある農業経営体の育成」「稼げる園芸の振興(果樹)」の 2 課題について報告し、福井県指導農業士会の上田輝司氏、福井県農業協同組合中央会農政生活部長の小林英範氏、キャリアデザイン総合研究所代表の佐々木史光氏、福井県立大学経済学部教授の堀田学氏、日本農業新聞福井通信部の増永ひとみ氏から評価を受けた。年度以降の普及計画に反映していく。

2) 普及指導員の資質向上

普及指導活動で直面する課題解決を図るため、普及指導員の資質向上をねらいとして、普及指導員研修会を 6 月 16 日に福井県国際交流会館で、「これからの普及指導員に期待されること～そのために必要な力をどうつけるか～」について、一般社団法人 全国農業改良普及支援協会 普及参事兼研修部長 関戸章一氏から講演をしていただいた。講演後は、グループワーク方式による意見交換を行い今後の活動に活かすようにした。

また、9 月 26 日～29 日に開催された「第 11 回農業普及活動高度化発表会」について、発表はナレーション付きパワーポイントファイルを審査委員が視聴する形となった。嶺南振興局二州農林部の赤堀巧主事が「ナシ産地への新規就農者の定着支援」と題した発表資料を作成・提出したが、農業普及活動高度化全国研究大会には進めなかった。なお、「第 11 回農業普及活

動高度化全国研究大会」は11月15日に開催され、多くの普及指導員がリモート視聴した。

令和6年3月7日、サンドーム福井において、普及活動高度化研究大会を開催した。農業経営支援部・課から6課題が発表され、キャリアデザイン総合研究所代表の佐々木史光氏他5名の審査を受けた。評価が最も高かった坂井農林総合事務所の「新たな担い手育成による三里浜砂丘地の再興 ～点をつないだ面での支援～」(吉田諒子主事)の活動事例は、令和6年度の全国農業普及活動高度化発表会に本県代表として発表することとした。

また、1月31日には若手農業職員活動報告研修会を開催し、任用3年目までの研究、普及、行政の各所属の職員間の連携強化を図った。

さらに、令和5年度全国普及指導活動研究会(普及方法)が2月26日に開催された。

この他、普及組織への新規採用者に対して、新任者研修(5月31日～6月1日)を実施し、本県農業の現状と課題について専門ごとの講習を行い、普及指導活動の基礎を研修するとともに、農試、園研センター、畜試、食研へ7日間の農業体験研修を実施した。さらに、水稻、野菜、経営、普及方法等において、基礎研修を行った。OJT研修については、マニュアルを一部改正し、トレーナー研修会、中間検討会、実績検討会を開催した。

農林水産省派遣研修は、すべてリモートで開催され、6講座11名が参加した。

普及指導員資格試験対策研修は、当該年度受験者のみならず次年度受験者も対象に含め、3月23日から11月上旬まで計7回開催した。模擬試験やグループ討議、受験生自らが問題を作成・解説するなど、資質向上を図った。

なお、北陸ブロック現地活動調査研究会は能登半島地震の影響により、中止となった。

(2) いちほまれ栽培技術の確立と普及(細川幸一)

1) 栽培マニュアルに基づく生産指導

チーム会をととして、各地区の稲リーダーと情報共有を図り、普及指導員の栽培指導を支援した。記録的な猛暑でコメの品質低下が懸念されたため、早刈りして外観品質を調査し情報提供するなど、例年より細やかな情報提供を行った。その結果、普及指導員の適切な指導につながり、いちほまれの1等比率は96%と高品質を確保した。しかし、発出した情報が十分に理解されないこともあったため、次年度に向けて各事務所内の情報共有や若手職員へ指導するよう指示した。

2) 栽培技術確立

増収を目的に穂肥分の溶出を早めた基肥一括肥料への変更をR2から肥料の変更を提案してきた。しかし、各地区の水稻リーダーから反対意見が多く、これまで変更を見送ってきた。その要因として、調査担当者が生育の想定や調査結果に基づく客観的な判断ができないことがあったため、R5は水稻リーダーに対し、生育の想定、調査の要点等をこれまでより綿密に提示したり、直接、圃場で指導した。その結果、適切な判断につながり、R6からの肥料の変更を決定した。また、水稻リーダーに対し、基肥一括肥施肥栽培での追肥の基準を示し、追肥の指導計画を策定するよう指示したところ、福井、二州では計画を作成した。

残された課題として、坂井、福井における直播栽培の低収が挙げられる。当該地区の水稻リーダーに対して、稲作検討会等で課題と対策を明確にして、R6に改善するよう指示した。

普及指導員の技術力向上を目的として、大学教授や他県の研究員を講師にダイズの根粒菌や流し込み施肥に関する研修会を開催した。

(3) データ駆動型農業の実践体制づくり支援、新品種導入によるミディトマトの産地拡大(渡邊紀子)

1) データ駆動型農業の実践体制づくり

ICTを活用したミディトマトの収量・品質の向上を図るため、①農業者主体の取組み支援(農業者自らが考える)、②データ処理(入力・収集・分析)の省力化(リアルタイムで議論)、③農業者間のデータ共有支援(多様な視点で議論)を課題とし、ICT施設園芸チーム会を開催した(6,7,8,11,2月)。

【解決目標】

データに基づき農業者同士で議論し、栽培管理を実施

年内収量（9～12月）の確保（収量4t/10a）

収量の安定化（収量13t/10a）

チーム会において、課題解決のための仮説の検討や検証を行った。また、先進事例を収集し共有するとともに、農業者が先進農業者に学ぶ機会を設けた。

目標とする農業者の行動変容には至らなかったものの、データに基づく判断意識は向上した。4経営体中2経営体が、年内収量4t/10a以上を確保した（作型は促成長期どりであるため、令和6年7月に実績検討を予定）。

2) 新品種導入によるミディトマトの産地拡大

ミディトマト新品種の推進体制づくりを行うため、①現地試験を通じた農業試験とは異なる条件下における品種特性の把握、②新品種に係る種苗供給体制や生産振興策の検討を課題とし、新品種ミディトマトチーム会を開催した（4～3月）。

場内試験と併せ県内3ヶ所での現地試験を実施し、チーム会において現地での栽培適応性を検討した。新品種候補系統の生育特性および課題と対応等について、関係機関と共有し意識統一を図った。次年度も継続して現地試験を実施する。種苗供給体制や生産振興策は今後の検討事項である。

（4）ナシおよびブドウの園芸タウン整備による産地振興（三輪直邦）

1) ナシ園芸タウン整備による産地再生

①ナシ園芸タウンの設置支援

担当普及指導員に対し、産地計画に盛り込むべき方針の項目（園地更新、担い手確保、園芸カレッジとの連携等）、計画の様式、生産者との協議の進め方等について助言した。年度末開催の部会総会において、全生産者に産地計画を披露して合意を得た。園芸カレッジ果樹コースにナシで就農を目指す研修生が2名入校するなど、ナシ園芸タウンの運営が実質開始された。

②レンタル圃場の整備支援

レンタル圃場の時期別の栽培管理項目を洗い出し、園芸振興課、園芸カレッジ、農業試験場で役割分担を協議、管理体制を整備した。今年度、新たに整備するレンタル圃場（約60a）については、園地設計、苗木植え付け計画の作成等を支援し、年度末に全レンタル圃場1.2haが完成した。

③ジョイント栽培の普及拡大

レンタル圃場でのジョイント作業に産地生産者、果樹担当普及指導員、市関係者等を招き、講習会と位置づけて全員で作業を体験した。ジョイント園の設置費用、栽培管理資材費などについて情報収集し、ジョイント栽培の経営試算を作成した。作成した経営試算をもとに、ジョイント栽培導入の経営モデルを作成した。あわら市、坂井市で計3名のナシ生産者がジョイント栽培の導入を決め、改植により40a程度のジョイント園を整備予定である。

④ナシコース誘致活動

県内外の就農希望者が参加した「体感バスツアー」、「マイナビ農林水産FEST（大阪）」等で園芸カレッジ果樹コースでの就農、ジョイント栽培での経営モデルを紹介し、ナシ専業での就農を呼びかけた。令和6年1月には、ナシ専業で就農を目指す研修生2名が園芸カレッジに入校した。

園芸カレッジ果樹コース（ナシ、ブドウ）の研修カリキュラムを作成し、作成したカリキュラムに沿って栽培概論等の講義を実施した。

2) ブドウの県域産地化（ブドウ園芸タウン）による生産振興

①新規就農者の技術習得支援

新規就農者（予定者含む）を中心に定期的な現地巡回指導を実施した。夏季の高温少雨時には、適正なかん水やハダニ類の防除について重点的に指導した。新規就農予定者には、担当普及指導員とともに就農計画の作成などを支援した。

②生産組織設置の検討

新規就農者の所得安定や県産ブドウのブランド化を図ることを目的に、農協でのブドウ生産部会の設置を目指し、JA 担当者やブドウ生産者と部会の運営方針、組織体制、集荷方法等について協議を続けた。部会を設置することで農協の合意が得られ、次年度産のブドウから部会による出荷を目指すこととなった。

③市場出荷の促進

市場が求める房規格、品種、出荷時期等を明らかにするため、量販店バイヤーと意見交換会を開催した（5月、計3回）。9月には、生産者が出荷したブドウを実際に量販店バイヤーに食味をしてもらい、粒の大きさや食味、糖度等について意見を交わした。

④高収益経営モデルの作成

ハウス、露地の施設整備経費、生産実績等について、生産者からの聞き取り等で情報収集し、高収益経営モデルを作成した。

（5）畜産経営支援（八木保善）

1）地域内での自給飼料生産拡大に向けた支援

ア 技術解決チーム会での検討（3回）

- ・畜産チーム会で飼料高騰対策として地域内での自給飼料生産するための調査研究活動を農業試験場の経営研究グループおよび高度営農支援課を中心に現地に調査することについて各事務所より了承を確認した。（5/26）
- ・第3回畜産チーム会では、今年度の子実トウモロコシ生産の状況について説明、9月末からの収穫実演を案内し、将来的な生産拡大についての情報提供を実施した。（9/27）
- ・第5回畜産チーム会では、子実トウモロコシ生産に関する栽培の作業性および経済性に関する考察についてチーム内で検討した。来年度以降の生産の課題について幅広い角度から議論した。6年度はさらに2ha増加して6ha程度に生産拡大する見込みである。

2）酪農・肉牛肥育経営への支援

ア 酪農衛生検査巡回指導

5/23 7/26 10/12 12/20 1/19 坂井管内
4/6 5/11 6/8 9/5 10/19 11/17 3/11 奥越管内

イ 新規就農者に対する経営指導

11/17 12/6 1/26 3/11 奥越管内で乳牛導入、酪農資金計画作成指導

ウ 技術解決チーム（酪農経営改善チーム）による活動

6/22 酪農暑熱対策研修
8/10 乳牛飼養管理技術研修

3）鳥インフルエンザ防疫対応＜普及計画に記載無し＞

- ・11月に佐賀県で高病原性鳥インフルエンザが発生し、以降、令和5年3月12日までに国内で10件の発生がみられた。
- 1月5日に隣接する岐阜県山県市での発生を受け、県内養鶏農家へ緊急の石灰配布を行うこととなり、農業試験場で備蓄していた石灰を配布し、配布後使用した分の補填も行った。

・福井、奥越、丹南管内養鶏農家14戸対象 1/9～1/19

4）今後の方向と課題

ア 自給粗飼料生産への支援

- ・飼料価格高騰を受け、畜産農家の経営安定を図るため、自給粗飼料の品質向上、適正な給与について検討を行い畜産農家の生産性改善をすすめる。

イ 若手酪農家への経営支援

- ・本県の酪農経営は、生乳生産量の減少、体細胞が高い状況にあり、乳量の増加と乳質安定の生産技術向上対策が必要である。
 - ・県内酪農家で世代交代が急速に進む状況で、次世代の農業者に対して経営や飼養管理技術の濃密的な支援が必要である。
- そのため新規経営開始や新たな加工に取り組む酪農家へ集中した技術支援を行う。

ウ 若狭牛の生産拡大

- ・若狭牛の枝肉は非常に高品質化しているが、枝肉重量が全国平均に比べ低い。また、近年実用化された制限アミノ酸の飼料添加や繁殖ホルモン剤の活用などによる若狭牛のさらなる肉質改善を行う。

(6) 農業経営発展支援（福田 成）

1) 関係組織連携による経営体の発展支援

農業経営支援計画検討会は7月から毎月、計10回開催し、78経営体が計画の認定を受け、中小企業診断士等専門家からのアドバイスを受けた。

2) 新規就農者の育成支援

本年度から、園振課農業人材Gと連携し、就農プランや人材育成、就農後の状況について、各事務所を巡回した。

3) 普及指導員の経営指導力の強化

普及指導員が実践的な経営指導が行えるよう、今月の農業技術（経営）において研修会を検討し、企画した。

- | | | | |
|-------|----------|----------|---|
| 10/ 5 | 新任者研修 | 農業経営・基礎1 | ①複式簿記の基礎、②はじめての決算書の読み方、
③園芸の経営シミュレーション作成 |
| 11/21 | 新任者研修 | 農業経営・基礎2 | ④農業経営とは、⑤農業共済・収入保険制度、⑥税金の基礎 |
| 10/10 | 新任者研修 | 農業経営・実践Ⅰ | ①決算書の見方・分析実践Ⅰ |
| 11/10 | 新任者研修 | 農業経営・実践Ⅱ | ②決算書の見方・分析実践Ⅱ |
| 12/15 | 新任者研修 | 農業経営・実践Ⅲ | ③SWOT分析の実践 |
| 2/ 8 | パワーアップ研修 | 農業経営 | 農業経営診断と改善のポイント |

(7) 6次産業化の推進支援（天谷美都希）

1) 本年重点を置いた活動

本年は、農家レストラン等開業を志向する農業者等を支援する能力を向上するため、「農家レストラン等開業支援研修」を11月から3回開催した。

また、普及指導計画や地域計画等の策定の技法を「コーディネーター能力向上研修」を10月より2回開催した。

さらに、大規模自然災害に備え、事業継続のための農業版BCP策定を学ぶ、研修を2月に1回開催した。

その他、ふくい農林水産支援センター主催で、①地域で取り組む農産物販売・流通、②農産物や加工品のセット販売、③昆虫類等の食品衛生対策について3回研修を開催した。

2) 活動の経過と成果

①農家レストラン等開業支援研修

近年、農家レストランや農家カフェなどを開業する事例や開業を希望する農業者が増えており、農家レストラン等の事業に関する普及指導員のサポート力の向上を図るため、(株)リテイルサポート 代表取締役 津田 均 氏を講師に迎え、11月、12月、1月の3回、研修を開催した。ビジネスモデルキャンバスやポジショニング分析、FL分析等の手法を学び、事業の可視化と見極めについて、グループワークを交えながら行った。

課題を抱える農業者を持つ普及指導員からはビジネスモデルキャンバスにより、課題の洗い出しに活用でき、たいへん参

考になり、今後、ビジネスモデルを描く手法を活かして、6次産業化やイノベーションに取り組む農業者支援に役立てたいと評価された。

②コーディネーター能力向上研修

地域コーディネーター機能の向上を図るため、一般社団法人食農共創プロデューサーズ 代表理事 長谷川潤一氏を講師に迎え、農業試験場において、10月、11月の2回、研修を開催した。マーケットインの視点を持つこと、SWOT分析から戦略を導き出すこと、バックキャスト思考により計画策定していくことなど、普及指導計画の策定、実施に非常に参考になるものであった。

対象者を6次産業化担当者以外にも広げたものの、その他の担当者の参加はわずかであった。施策立案等に必要な知識であるため、次年度も全職員を対象として計画に入れていきたい。

③災害対策研修

農業経営における自然災害に対する備えとして、農業版BCP（事業継続計画）作成について、株式会社ケミストリー 代表取締役 村上一幸氏を講師に迎え、農業試験場およびリモートにより、2月に研修を行った。BCP 計画策定において、人命を守る行動、事業を回復、継続、復旧のための対応を決め、災害に備ええることが、事業継続性につながる。

なお、農業版BCPの詳細な策定方法や災害時の対応など、災害対策の研修を今後も継続する必要がある。

3) 今後の方向と課題

今後も農山漁村発イノベーションや農村活性化などの地域振興に関する研修については、6次化担当者だけでなく、普及指導員にも参加を促し、資質向上を図る必要がある。

4. 県民に開かれた研究機関を目指す活動

(1) 高校・大学受け入れ授業

農業試験場では、県内の農業系学科を有する高校と共働し、出前講座や試験場での実習授業等を行うことで、次世代を担う若手農業者の育成に取り組んでいる。

講座や実習、インターンシップの受け入れについては、コロナ対策を徹底しながら実施した。

No	実施日	対象	人数	配属G
1	6月13～17日	高校生	4名	本場各研究G
2	8月21～25日	大学生	1名	本場各研究G
3	9月19～22日	大学生	3名	本場各研究G、園芸研究センター
4	10月25～26日	中学生	2名	本場各研究G

(2) プレスリリース実績

No	実施日	タイトル	対応部署
1	4月25日	園芸LABOの丘「ゴールデンウィークイベント」を開催します！	園芸LABO
2	4月27日	ご飯の匂い成分の特徴と保管による変化（福井大学と共同プレス）	水稻育種研究G
3	7月16日	園芸LABOの丘 開館4周年記念イベント	園芸LABO
4	10月3日	炊飯時の匂い成分のリアルタイム分析を実現（福井大学と共同プレス）	水稻育種研究G
5	10月19日	スイセンの球根養成における省力化技術を用いた植え付けについて	野菜・花き研究G
6	10月29日	園芸LABOの丘「秋フェスタ2023」を開催します	園芸LABO
7	2月23日	春よこい！LABOフェスタ2024を開催します	園芸LABO

8	2月29日	農業研究に係る合同成果発表会を開催します！	企画・指導部
---	-------	-----------------------	--------

(3) 講演会・出前講座

No	実施日	講 座 名	会 場	講 師	
				所属部署	氏 名
1	5月22日	デジタル機器を使った稲生育診断研修会「水稲の生育診断アプリ Growth eye の使い方（実演）」	JA 福井県嶺南営農経済センター	品種開発研究部	小林麻子
2	5月30日	ぶどう栽培技術（苗木の育成）〔ワインカレッジ〕	農業ビジネスセンター	品種開発研究部 高度営農支援課	坂川和也 三輪直邦
3	6月21日	令和5年度福井市認定農業者会総会「『いちほまれ』の美味しさの秘密を科学する」	ウェルアオッサ	品種開発研究部	小林麻子
4	7月27日	「雇用確保の観点から見る法人化について」 福井県農業会議 農業法人化研修会	福井県中小企業産業 大学校	経営研究 G	小島佳彰
5	8月7日	「雇用確保の観点から見る法人化について」 福井県農業会議 農業法人化研修会	サンドーム福井	経営研究 G	小島佳彰
6	10月4日	職業発見講座	大野高校	品種開発研究部	中岡史裕
7	12月25日	高志農業士会研修会「水稻育種研究グループの取り組み」	ホテルフジタ	品種開発研究部	小林麻子
8	1月11日	「農業経営の種類について」 福井県立大学生物資源学部創造農学科 食農環境実習演習Ⅰ講義	福井県立大学 あわらキャンパス	経営研究 G	小島佳彰
9	1月30日	たんなん稲作研究会「水稻生育診断アプリ『Growth eye』の紹介」	JA 鯖江中央支店	品種開発研究部	渡辺脩斗
10	2月4日	福井県内のカブの現状と特徴、課題〔現場でトーク〕	木田公民館	品種開発研究部	中村美香
11	2月6日	福井県農業士会研修会「異常気象に強い品種育成」	ウェルアオッサ	品種開発研究部	小林麻子
12	2月16日	奥越地区農業担い手研修会「異常気象に強い品種育成」	大野市職業訓練センター	品種開発研究部	小林麻子
13	2月20日	二州地区農業士会・二州百姓一家研修「水稻生育診断アプリ『Growth eye』の活用手法について」	敦賀合同庁舎研修館	品種開発研究部	小林麻子
14	3月26日	「稲作における農福連携取組事例について」 NPO 法人ピアファーム ふくい農福連携ネットワーク研修会 福井の農福連携を考え深める研修会	福井県立大学 あわらキャンパス	経営研究 G	小島佳彰

(4) 園芸 LABO の丘による園芸教室と体験講座

「園芸 LABO の丘の来場者数」

月		来場者数	
(人)		令和5年度	
累計 (人)			
4月		3,181	3,181
5月		6,193	9,374
6月		3,687	13,061
7月		5,790	18,851
8月		3,560	22,411
9月		4,057	26,468
10月		5,456	31,924
11月		4,199	36,123
12月		3,013	39,136
1月		2,241	41,377
2月		4,072	45,449

「園芸教室」

地域の園芸振興のため、野菜を中心とした栽培技術の基礎を習得する場として、農業者に加え園芸に興味のある地域住民を対象に年間9回の講座を開催した。また、受講者から品質の良い果物を生産する栽培技術を学びたいとの要望に応え、6月から3月にかけて、延べ6回の果樹栽培に関する講座を開催した。講義中は受講者から数多くの質問が出される等、野菜栽培への関心の高さが窺われた。

・野菜を中心とした栽培講座

令和5年4月7日(金)～令和5年2月16日(金) 9回開催 時間9:30～11:30

・果樹特別講座

令和5年6月2日(金)、10月6日(金)、11月4日(土)、令和6年3月16日(土)、3月17日(日)、3月24日(日)の6回開催

【場所：いずれも園芸LABOの丘】

(野菜等栽培講座)

No	開講日	講義内容	担 当	対象・参加人数
1	4月7日	開講式 野菜畑の土づくりと春播き野菜・ミニ野菜栽培のポイント	園芸研究センター所長・課長 宮原講師	一般 46名
2	5月12日	主要果菜類の当面の管理 コンパニオンプランツの植付け 主要果菜類・マメ類の病害虫と防除 主要果菜類の生理障害と防止対策	宮原講師	一般 40名
3	6月2日	春播き(植え)野菜類及び越冬野菜類の収穫 春播き葉茎菜類・根菜類などの病害虫の特徴と防除の一例 春から初夏に播種、定植できる主要花き類	宮原講師	一般 31名
4	7月7日	夏秋播き(定植)野菜類の栽培ポイント 夏秋播き(定植)野菜類の間引きと追肥 野菜のプランター栽培	宮原講師	一般 34名
5	8月4日	夏秋播き主要野菜類の病害虫と防除 野菜栽培で多い質問とその対策	宮原講師	一般 29名

6	9月1日	越冬マメ類の播種(定植) まだ間に合う夏秋播き野菜類の播種 夏秋播き主要野菜類の管理と収穫のポイント	宮原講師	一般 33名
7	10月6日	秋冬野菜類の管理と収穫 越冬野菜類の管理 越冬野菜類の主な病害虫と薬剤防除	宮原講師	一般 36名
8	11月10日	夏秋どり野菜類の収穫のポイントと美味しい食べ方 来年の野菜づくりに備えて	宮原講師	一般 36名
9	2月16日	ジャガイモの栽培と越冬野菜の管理 閉講式	園芸研究センター所長・課長 宮原講師	一般 36名

(果樹特別講座)

1	6月2日	美味しい果物づくり① -春から収穫までの管理-	宮原講師	一般 31名
2	10月6日	美味しい果物づくり② -果樹類の花芽分化と施肥-	宮原講師	一般 36名
3	11月4日	ビギナーにもわかるウメ剪定教室	山本仁 氏	一般 5名
4	3月16日	ブルーベリー鉢植え教室	LABO職員	一般 **名
5	3月17日	梅の文化講座 ～梅が辿ってきた道～	宮原講師	一般 **名
6	3月24日	レモン「瑠の香」鉢植え教室	LABO職員	一般 **名

「体験・講座」

園芸に親しむ各種の講座を実施した。

区分	体験名	開催回数 (回)	体験者数 (人)
科学 実験	野菜のプランター播種体験	1	7
	おうちでトマトの植え付け体験 (YouTube視聴者限定)	2	15
	おうちでトマトの植え付け体験	2	41
	トマト植付け体験	2	48
	LABOも植えるトマト「ティポ」を栽培しよう	1	7
	絶対おいしいトマト植付け体験	1	7
	サツマイモ植付け体験	1	47
	新たまねぎの収穫体験 (YouTube視聴者限定)	1	30
	トマト収穫体験	44	990
	トマトハウス栽培管理体験	1	12
	ウメ収穫体験	2	52
	タマネギ収穫体験	6	28
	ニンニク収穫体験	7	15
	ジャガイモ収穫体験 (YouTube視聴者限定)	3	7
	ジャガイモ収穫体験	1	210
	カエルプランターイチゴ植付け体験	1	14
	イチゴの植え付け体験	1	9
科学	サツマイモの収穫体験	2	302
	ビギナーにもわかるウメ剪定教室	1	5

実験	ミカンの収穫体験	4	32
	ハーブを挿し穂で増やそう	1	16
	盆菊の挿し芽をやってみよう	4	36
	ミニ多肉植物の挿し木講座	1	5
	おかめアジサイの挿し木講座	1	4
	アロマティカスの挿木	2	15
	ミニバラ栽培講座	2	9
	盆ギクの収穫体験	2	17
	カランコエの剪定体験	2	5
	多肉植物「臥牛」植え替え体験	1	8
	秋の花摘み取り体験（SNS視聴者限定）	3	11
	コノフィツム植え替え体験	1	20
	カサブランカ球根の寄せ植え体験	1	6
	クリスマスチューリップの寄せ植え体験	1	10
	ヒヤシンスの水耕栽培体験	2	6
	ヤマユリの定植体験	1	2
	四季バラの鉢植え体験	1	11
	熱帯観葉植物播種体験（YouTube視聴者限定）	4	7
	河本バラ園のバラ鉢植え体験	3	23
	フリージア栽培講座	1	15
	マリモ釣り	2	90
	カブトムシ幼虫探し体験	3	110
	ハーブのこねこね石けんづくり	6	109
	ボタニカルキャンドルづくり	2	6
	爽快アロマスプレーづくり	2	20
	キラキラ石けんづくり	1	3
	フレグランスジェル&ヒールケアクリームづくり	1	6
	好きな多肉植物の植え付け体験		
	北陸新幹線延伸記念 ブルーベリー鉢植え体験		
	珍しいレモン「璃の香」の鉢植え体験		
	夏休み自由研究プログラム・サボテンの無菌播種をしてみよう	1	5
	夏休み自由研究プログラム・葉脈観察と葉脈アートづくり	2	9
	夏休み自由研究プログラム・廃棄野菜の色素で宝石せっけんづくり	2	12
	夏休み自由研究プログラム・甘いトマトは何？	1	7
科学実験 小計		141	2,481
調理 実習	ウメシロップづくり体験	22	286
	生ウメでシロップづくり体験	1	20
	ピザづくり	3	89
	ミニピザづくり	5	127
	もちっと！よもぎ餅づくり教室	2	30
	ふんわり！よもぎ蒸しパンづくり教室	2	19
	LABO産新タマネギを使ったお好み焼きづくり	6	48
	鯉のぼりロールづくり	2	36
	LABO産一寸ソラマメでオムレツとムースづくり	1	12
	LABO産ニンニクで手作り餃子とトマトサラダづくり	1	21
	ブルーベリーで ふんわり♡オムレットづくり教室	2	22
	ジュノベーゼパスタづくり教室	1	1
	ハヤシライスづくり教室	2	10
	2色のポテトコロケランチづくり教室	1	14
調理	シャインマスカットのタルトづくり教室	2	33
	シャインマスカットのタルトづくり特別体験	1	8

実習	五穀米と色彩野菜の和風ランチづくり	2	31
	ハロウィンだ！ かぼちゃシフォンケーキづくり	2	22
	レモン調理体験[レモンジュース]	1	100
	免疫力アップ！ネバネバパワーランチづくり	1	6
	2色のサツマイモモンブランづくり	2	13
	アイスクリームづくり	1	34
	サンタの和風クリスマスランチづくり	2	8
	Xmasブッシュドノエルづくり	2	35
	ゆずシロップづくり	7	10
	春のヘルシーランチづくり	1	8
	二刀流アップルづくり	2	28
	バレンタイン 簡単マディアンづくり	2	34
	栄養満点！ぶり大根ランチづくり	1	10
	キクイモのはし巻きづくり	1	95
	春よこい ひな祭りお子さまランチづくり		
	春の天ぷらランチづくり		
	北陸新幹線延伸記念 北陸新幹線ケーキづくり		
	調理実習 小計	81	1,210
工芸 体験	母の日花の寄せ植え体験	2	47
	暑い夏を吹き飛ばそう！花の寄せ植え	4	42
	秋の気配を先取り！寄せ植え教室	2	35
	お正月の寄せ植え教室	2	41
	春に咲くビオラと葉牡丹の寄せ植え教室	1	22
	一足早く春を堪能する寄せ植え体験（YouTube視聴者限定）		
	母の日フラワーアレンジメント	2	9
	ハロウィンだ！ フラワーアレンジメント教室	1	12
	バレンタイン フラワーアレンジメント教室	1	9
	おうちで鉢植え体験	2	33
	フィルムプランターに絵を描いて花苗を植えてみよう	1	114
	季節の寄せ植え体験	4	78
	お正月の寄せ植え特別体験	1	12
	春を感じる寄せ植え体験	1	12
	生きている宝石箱「リトープス」の寄せ植え教室	1	9
	多肉植物の寄せ植え体験	2	40
	木工工作体験（無料）	3	45
	miniボトル水族館づくり	2	45
	マリモでminiアクアリウムづくり	1	9
	花&蝶のプチハーバリウムづくり	4	56
	簡単グッズづくり	3	76
	カラフルひよこづくり	2	5
	花苗の植付け体験(はあとふる体験)	3	52
	フラワー缶づくり	5	91
	手編みのドロップリースづくり	2	14
	フラワージェルサンドアートづくり	2	6
	夏花のハンギングスワッグづくり	1	10
	ミニ壁かけボードづくり	4	68
	花束ハーバリウムづくり	3	20
	ハロウィンだ！ 秋色miniリースづくり	2	7
	コキアの秋色スワッグづくり	1	14
工芸	ハロウィン ハッピーほうきづくり	2	30
	ホワイトスワッグづくり	1	7

体験	季節のトピアリーづくり	2	20
	しめ縄リースづくり	1	9
	卓上フラワー門松づくり	2	18
	プレートアレンジ・ゴージャス編	1	8
	プレートアレンジ・ふわふわブーリー編	1	7
	プレートアレンジ・蝶&ブーリー編	1	13
	種のマグネットアート	31	373
	ジュズダマグッズづくり	23	87
	押し花カードづくり	30	215
	どんぐり人形の壁かけづくり	2	38
	冬のまつぼっくりツリーづくり	7	24
	春のスウィングスワッグづくり		
	北陸新幹線延伸記念 恐竜サンドアートづくり		
	工芸体験 小計	169	1,882
体験・講座 合計		391	5,573

「展示・観察」

園芸LABOの施設や園地の展示・機器を活用した自然観察会等を開催し、園芸についての普及啓発を行った。

内 容	開催回数	体験人数
	(回)	(人)
トマトハウス見学ツアー	115	1,785
自然観察	200	3,272
自然体験	18	123
合 計	333	5,180

(5) YouTube での動画コンテンツやSNS(X(旧 Twitter)、LINE)等での情報発信

園芸LABOの丘に来館しなくても園芸を楽しめる動画をめざし、2021年1月21日にYouTubeで動画配信を開始した。

主に園芸植物の四季折々の様子や栽培管理、昆虫、自然の科学知識を高める動画、園芸LABOで行った栽培講座の動画コンテンツを紹介しており、2月末現在でチャンネル登録者数は3,300名以上、総動画再生回数は95万回以上に達している。

また、SNS(X(旧Twitter)やLINE)やホームページを活用し、園芸LABOの体験講座や施設・園地の様子などの情報を積極的に行っている

SNS等	項目	2月末現在
LINE	登録者数 ^(※)	444
	配信数	38
X(旧 Twitter)	フォロワー数 ^(※)	350
	ポスト数	772
	インプレッション数	508,212
	いいね数	7,704
YouTube	チャンネル登録者数 ^(※)	3,387
	動画投稿本数(ショート動画含む)	341
	〃 開始から ^(※)	853
	動画視聴回数	655,606
	〃 開始から ^(※)	963,001
ホームページ	ホームページ更新数	35

(※)：開始時からの累計

5. 県、大学、高校等農業関係機関による意見交換

(1) 農業研究に係る合同成果発表会

- ・令和6年2月29日 福井県生活学習館 3階映像ホール
- ・参加者 福井農林高校、坂井高校（学生、教諭等）、福井県立大学（学生、教授等）、農業試験場職員他
農業技術の研究開発を担う職員や学習に取り組む学生等が統一テーマに応じ、其々の研究や調査活動とその成果を発表、情報共有することで、農業農村振興に関わる意識醸成や、知識・技術の向上を目指した。
発表内容について、ふくいの農業を牽引する農業者をはじめとした関係者が、其々の立場からの提言や意見を発言いただくことにより、個々の研究活動や施策等に反映させた。

6. 農業者等の視察対応

- ・2023. 7. 20 おおぞら農業協同組合 県外視察（いちほまれの開発経緯等）12名
- ・2023. 11. 9 北海道空知農民連合 県外視察（いちほまれの開発経緯等）24名
- ・2023. 11. 30 香川県まんのう町農業経営者協議会 県外視察（コシヒカリ等の育種について）13名
- ・2023. 12. 25 高志農業士会（品種育成の状況について）5名

7. 論文、雑誌、著書、発表、広報等

(1) 論文

- ・Keishi Yamashita, Nanako Kato, Kento Sakakibara, Aki Seguchi, Asako Kobayashi, Shinobu Miyagawa, and Tomohiro Uchimura (2023) 3c01276Characterization of Cooked Nonglutinous Rice Cultivars Based on Flavor Volatiles and Their Change during Storage. ACS Omega 2023 8 (16), 14823-14829
- ・小林麻子・中岡史裕・渡辺脩斗・茶谷弦輝・町田芳恵・佐藤信仁・内村智博（2024）官能試験による炊飯米の香りの品種間差. 北陸作物学会報 58（印刷中）
- ・渡辺脩斗・小林麻子・中岡史裕・茶谷弦輝（2024）福井県の水稲奨励品種を判別するSSRマーカーセットの再改良. 北陸作物学会報 58（印刷中）
- ・小島佳彰「稲作法人における障害者就労の可能性」関東東海北陸農業経営研究 114（2024）

(2) 著書

- ・小林麻子 「水稲品種育成における品質・食味の評価と選抜」 農産物検査とくほん 228号

(3) 学会等講演発表

- ・小林麻子 「農業試験場のしごと」 岡保小学校視察 2023. 6. 7
- ・小林麻子 「福井県農業試験場が作った新しいお米『越のリゾット』」 円山小学校研修会 2023. 7. 12
- ・小林麻子 「福井のお米はなぜおいしいか」 福井商業高校フィールドワーク研修 2023. 8. 9
- ・小林麻子・菅波眞央・吉田英樹・渡辺脩斗・町田芳恵・茶谷弦輝・中岡史裕・森中洋一・三浦孝太郎・佐藤信仁・松岡信「福井の育種家は出穂関連遺伝子をどのように利用してきたか？」日本育種学会第 144 回講演会 2023. 9. 16 (神戸大学)
- ・中岡史裕・小林麻子・渡辺脩斗・両角悠作・町田芳恵・茶谷弦輝・三浦孝太郎・山崎将紀：「水稻品種「いちほまれ」より胚乳澱粉の糊化開始温度が低い突然変異系統の特性」 日本育種学会第 144 回講演会 2023. 9. 17 (神戸大学)
- ・小林麻子 「良食味米「コシヒカリ」の育成と普及」国際国内粳稻产业发展进行学术讨论 2023. 9. 20 (オンライン)
- ・小林麻子・中岡史裕・渡辺脩斗・茶谷弦輝「品種登録における「重要な形質」である止め葉長および止め葉幅について」北陸作物・育種学会第 60 回講演会 2023. 10. 20
- ・中岡史裕・小林麻子・渡辺脩斗・茶谷弦輝：「保管後の水稻種子の含水率または休眠打破の有無と発芽率の関係」 北陸作物・育種学会第 60 回講演会 2023. 10. 20
- ・小林麻子 「福井県農業試験場における水稻品種開発の取り組み」 北海道空知農民連合研修会 2023. 11. 9
- ・小林麻子・中岡史裕・渡辺脩斗・茶谷弦輝・町田芳恵・佐藤信仁・榊原賢人・内村智博「GS/MS 測定および官能評価による炊飯米の香りの品種間差」日本品質・食味研究会第 15 回講演会 2023. 11. 11 (明治大学)
- ・中岡史裕・小林麻子・渡辺脩斗・両角悠作・町田芳恵・茶谷弦輝・三浦孝太郎：「水稻品種「いちほまれ」より胚乳澱粉の糊化開始温度が低い突然変異系統の食味特性」 日本品質・食味研究会第 15 回講演会 2023. 11. 12 (明治大学)
- ・渡辺脩斗・吉田英樹・小林麻子・菅波眞央・松岡信「ゲノム塗り絵」日本育種学会第 145 回講演会 2024. 3. 17 (東京大学)
- ・中岡史裕・小林麻子・茶谷弦輝・渡辺脩斗・佐藤信仁・山崎将紀：「「コシヒカリ」と「アケボノ」の組換え自殖系統を用いた水稻の高温登熟性に関する QTL 解析」 日本作物学会 257 回講演会 2024. 3. 29 (三重大学)
- ・田中裕介：「キウイフルーツにおけるエチレン処理後の温度の違いが果実品質に及ぼす影響」 (園芸学会北陸支部 令和 5 年 12 月 8 日)
- ・長谷亘真・榊田恭恵：「‘ニホンズイセン’球根における冷蔵処理が球根養成に及ぼす影響」 (園芸学会北陸支部 令和 5 年 12 月 8 日)
- ・澤崎光希：「タマネギの体内窒素濃度からみた効果的な追肥時期の検討」 (園芸学会北陸支部 令和 5 年 12 月 8 日)
- ・川崎武彦・山形惇平・藤田雄大：「房どりミニトマトにおける摘果による裂果・収量に及ぼす影響」 (園芸学会北陸支部 令和 5 年 12 月 8 日)
- ・山形惇平・藤田雄大・川崎武彦：「ミディトマトの低段密植栽培における養液 EC の違いが果実糖度および収量に及ぼす影響」 (園芸学会北陸支部 令和 5 年 12 月 8 日)
- ・坂本浩・林恵美子・畑下昌範：「イオンビーム照射を利用したニホンズイセン矮性系統‘20 の 1’の作出と鉢花利用の検討」 (園芸学会北陸支部 令和 5 年 12 月 8 日)
- ・寺下貴晃：「福井県における近年の気候変動に伴う園芸分野の課題とその対策」 (園芸学会北陸支部シンポジウム 令和 5 年 12 月 9 日)
- ・猿橋由恵：「安全・早期多収なウメ「福太夫」の低樹高栽培」 (落葉果樹研究会 令和 6 年 2 月 6 日)
- ・小島佳彰：「稲作法人における障害者就労の可能性」関東東海北陸農業試験研究推進会議経営部会春季研究会シンポジウム講演 令和 5 年 7 月 10 日 (農研機構)

(4) 広報

1) 日本農業新聞 アグリトウモロウ

- ・ウメ「福太夫」の早期多収・脚立不要なコンパクト樹形：園研センター 猿橋由恵
- ・生育状態を見極め米の収量・品質向上：品種開発研究部 小林麻子
- ・分施肥系への転換で肥料費削減：次世代技術研究部 藤田純代
- ・越前スイセンの分球抑制技術：園研センター 長谷亘真
- ・ねぎのネダニ類の簡易調査方法と対策：次世代技術研究部 横山康幸
- ・越前スイセンの切り花品質保持技術：園研センター 長谷亘真
- ・今年の稲作を振り返って：企画・指導部 細川幸一
- ・房どりミニトマトの品種選定：園研センター 山形惇平
- ・キウイフルーツのおすすめ品種：園研センター 田中裕介
- ・越冬後幼穂長による大麦出穂予測：次世代技術研究部 山口泰弘

8. 職員の研修、客員教授の招聘、職員の受賞

(1) 客員教授の招聘

アドバイザーボード；

- ・令和5年10月30、31日
森山英樹氏（農研機構）
「中山間の未来をうるおす超省力コンパクト園芸の確立」
- ・令和5年10月30、31日
森山英樹（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構）
「小型パイプハウスの耐風構造について」
「小型パイプハウスにおけるコストを抑えた強風対策について」
- ・令和6年2月8日
大室健治氏（農研機構）
「緑肥等を組み合わせた持続可能な水田転作体系の確立」

9. 一般報告

(1) 施 設

①	本 場	福井市寮町辺操 52-21	
		本場本館（鉄筋 3 階建）	2,524.52 m ²
		作業室その他 64 棟（農業研修館、近代化センター含む）	8,830.59 m ²
		計	11,355.11 m ²
		水 田 圃 場	39,629.00 m ²
		原 種 圃 場	41,038.00 m ²
		そ菜および普通畑	9,203.00 m ²
		果 樹 園	15,828.00 m ²
		敷地および水路	67,556.20 m ²
		山 林 そ の 他	127,184.74 m ²
		計	300,438.94 m ²
②	園芸研究センター	三方郡美浜町久々子 35-32-1	
		本館（鉄筋 2 階建）	1,152.91 m ²
		園芸体験施設「園芸 LABO」（木造 1 階建）	580.50 m ²
		収納調査棟その他 16 棟	2,754.19 m ²
		計	4,487.60 m ²
		宅 地	108.76 m ²
		田	21,071.50 m ²
		畑	52,587.60 m ²
		原 野	1,878.80 m ²
		雑 種 地	3,637.30 m ²
		園芸体験施設用地	23,395.57 m ²
		計	102,679.53 m ²

(2) 予 算

① 歳 入（令和 5 年度予算額）

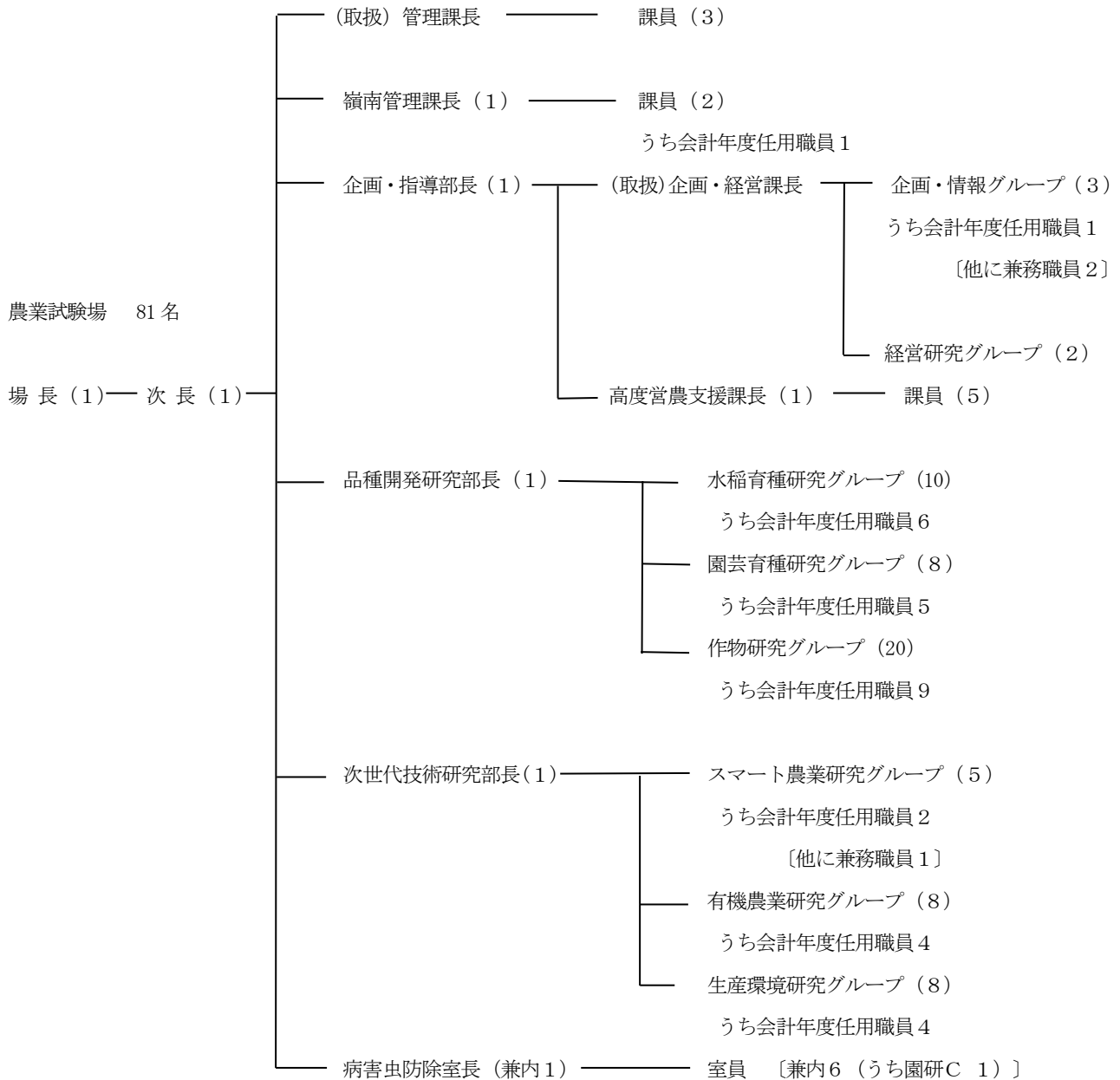
項 目	予算額(千円)	摘 要
使 用 料	66	行政財産使用料
財 産 運 用 収 入	1,074	建物貸付料、特許権等実施料
財 産 売 払 収 入	9,333	農産物売払代
雑 入	2,347	水道料個人負担金、電気料個人負担金、園芸LABO体験料、その他
計	12,820	

② 歳 出（令和5年度予算額）

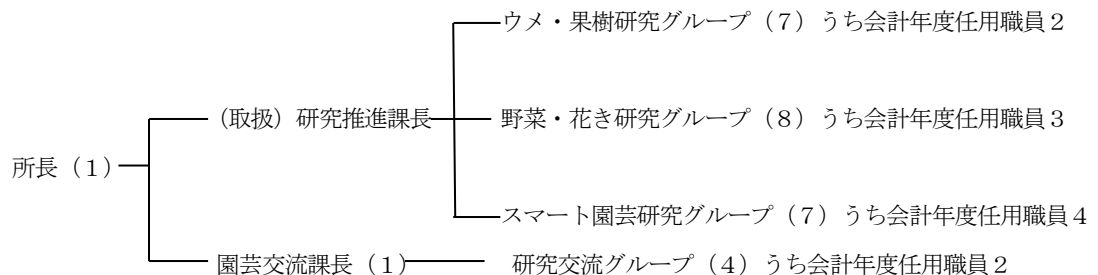
項 目	決算額(千円)	摘 要
本 場 運 営 費	76,627	農業試験場の維持管理、人件費、圃場管理業務委託
試 験 場 運 営 費	59,671	園芸研究センター・圃場・母樹園等の運営維持管理 園芸体験施設の運営維持管理、園芸教室講師謝礼、大規模修繕
戦 略 的 研 究 開 発	3,869	安定良食味な水稻早生品種の開発 病気に強く省力生産できるミディトマト新品種の育成
農 林 水 産 業 の 技 術 開 発	1,051	行政・普及からの要請にもとづく試験研究課題
中 小 企 業 振 興 費	18,889	甘い！大っきい！福井オリジナルイチゴ新品種開発と多収技術確立 ICT情報を活用した水稻自動可変施肥とスポット除草技術の確立 ふくい柿の産地力を向上させる技術開発 直売所に広めるくだもの栽培技術の確立 一年中おいしい‘越のルビー’を生産する低段密植栽培技術の開発 夏季の異常気象に対応できる白ネギ生産技術の確立 【新】緑肥等を組み合わせた持続可能な水田利用体系の確立 【新】中山間の未来をうるおす超省力コンパクト園芸の確立 【新】ウメの超省力・スマート果樹栽培体系の確立
農 業 総 務 費	6,147	地域課題解決試験研究、農林水産新技術等習得事業、 試験研究課題課・評価システム事業、伝統野菜原種供給事業、 人件費（会計年度任用職員共済費）等
農 業 経 営 対 策 費	403	米粉試験研究事業 等
農 作 物 対 策 費	8,519	基本調査事業、原原種原種ほ設置事業、優良種子生産体制確立事業、 肥料検査登録事業、土壌由来温室効果ガス事業、モニタリング調査事業、 基準点調査事業 等
農 業 改 良 普 及 費	3,127	普及指導員研修費、県域普及員活動費、農山漁家生活近代化センター費
植 物 防 疫 費	21,372	農薬抵抗性検定事業、病虫害発生予察事業、病虫害防除所運営事業、 減農薬防除体系実証事業 等
グ リ ー ン セ ン タ ー 費	1,520	農地土壌の炭素貯留能力を向上させるバイオ炭資材等の開発
人 事 管 理 費	92	能登半島地震職員派遣旅費
財 産 管 理 費	130	県有自動車管理費
計 画 調 査 費	1,391	新幹線農作物影響調査
計	202,806	

(3) 組織と職員数

(令和5. 10. 1現在)



(附置機関) 園芸研究センター 28名



職員数 109名

(事務職員 15名、技術職員 11名、研究職員 40名、会計年度任用職員 43名うち嘱託2名)

(4) 人 事

職 種 別 人 員

(令和5.10.1現在)

職 名	行 政 職		研究職	会計年度 任用職員 (嘱託)	会計年度 任用職員 (パート)	計	備 考
	事務	技術					
技 術 職 員 場 長			1			1	
事 務 職 員 次 長	1					1	
課 長	1					1	
主 任	3					3	
企 画 主 査	3					3	
主 査	3					3	うち 再任用職員 1
主 事	4					4	うち 再任用職員 4
技 術 職 員 部長・所長		1	3			4	
課 長		2				2	
主 任		6				6	
主任研究員			15			15	
研 究 員			4			4	
主 査		1				1	うち 再任用職員 1
主 事		1	17			18	うち 再任用職員 3
会計年度任用職員（嘱託）				2		2	園芸交流推進員
会計年度任用職員 (パートタイム)					41	41	
計	15	11	40	2	41	109	

(5) 主な備品等（令和5年度、50万円以上）

品 名	数量	金額(円)	型 式
スマート害虫モニタリング装置	2	7,700,000	RYNAN TECHNOLOGIES VIETNAM JSC M30A2SA
リアルタイム PCR システム	1	6,050,000	QuantStudio3 リアルタイム PCR システム Fast96 ウェル
チップーシュレッダー	1	3,179,000	ゼノア SR3100
散布用ドローン	1	2,387,000	クボタ農業用ドローン T30K セット
エアーサンプラー	1	2,233,000	ポータブル ドライサイクロン コリオリス・コンパクト
小型パイプハウス（換気設備、灌水設備を含む）	1	2,081,200	間口 3.6m、奥行 30m、軒高 2 m 本体、換気、被覆資材、灌水設備を含む
脱穀機	1	1,335,400	脱穀機 DASH-60AT 型
食器洗浄機	1	1,069,200	サニジェット食器洗浄機（ガス式） SD62GB
人工気象器	1	841,500	LH-120PFD-RD（電球色） 庫内コンセント付
ロボット芝刈機	1	609,598	ハスクバーナ AUTOMOWER 435X AWD
ロボット草刈機	1	604,637	ハスクバーナ AUTOMOWER 450X